
異世界者

レックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界者

【Nコード】

N3613K

【作者名】

レックス

【あらすじ】

神のシステムのバグ……それによって死んだ人間は、神の手によって転生させられた。異世界最強系転生物語。

第一話 神のミス（前書き）

最初の巫女の化神もそのうち書きます……再び煮詰まってしまったので。

第一話 神のミス

人は、その人生を終えると輪廻の中へと戻っていく。

そして、転生する。

輪廻転生。

本来その輪から外れることはなく、永遠と転生を繰り返す。

この世界では、それをシステムとして取り入れている。

この天上界では。

天上界において、ベルトコンベアに乗せられた死者の魂はA?により転生先の世界を選別され転生させられる。

そこに、生前の所業などあまり加味されない。

というよりも、1か0の二つしかない。

1のものは才能を余計に一つ与えられ、0のものは才能を追加されない。

ただそれだけ。

だが、ある時間問題が起こった。

転生システムにおいてバグが発生したのだ。

理由は不明だが、神は万能ではなかったのかもしれない。

バグは刹那の間に修正され被害は最小限に留められた。

そう、ある世界の一人の人間が死亡しただけで済んだのだ。

しかし、天上界で神はおおいに責められた。

彼の座を狙うものは多く、無責任な非難が飛び交った。

表向きは被害にあった人間を慈しむ言葉ばかりだが、裏では神の責任を問うている。

神は言った。

「では、その人間に対し最大限の便宜を図ろう」

だれも反対できなかった。

それは、そうだろう。

今まで自分たちが神に要求してきたことなのだから。

神は、人間と話をすることにした。

自分が殺してしまった人間と。

そのものに最大限の便宜を図るために。

ただ、その行為は痛く神を摩耗させるものだった。

神の管理すべき輪廻転生システムそれをすべてA?に任せていたせいで、力が衰えていたのだ。

いや、単なる老化か……

本来、神は一千億年ごとに変わる。

寿命によって。

いかに高位の存在であってもそれ以上の時は輪廻転生を管理できないのだ。

しかし、現行の神は三千億年それが続けていた。

AIを駆使することによって。

そのことが今回周りの非難を助長させ、事態に拍車をかけたのだが、事実神は史上最長の期間神であった。

神として、最も優秀で怠惰であった彼は今回のことで神をやめることになるだろう。

それを十分わかっている彼は、決意した。

神を自ら辞め、残りの生涯すべてをその人間への償いに充てることを。

行動は速かった。

神は、その職を次世代のものに譲りその魂と共に異次元へと赴いた。

そして、人間の望む願いを叶えた。

叶えられなかった二つの願いは、元の世界に戻すことと家族と会話することだった。

第二話 神と人（前書き）

いまだプロローグのようなものです。会話文ばかりですが

第二話 神と人

川谷涉享年二十歳。生前は、国立大学経済学部に所属。アルバイトはしておらず、サークルにはいくつか入っていた。ごく普通のオタクであった。入っていたサークルはインドア系が一つスポーツ系が一つボランティア系が一つである。案外友達も多かった。男友達ばかり二十人ほど。そんな彼の死因は不明。自宅にいたところ、まるでいきなり魂を抜かれたかのように死んでいたらしい。彼の葬式には多くの参列者が訪れ彼の死を悼んだ。親友と姉と妹この三人の落ち込みようは、周りの人が声もかけられない状態だったという。だが一方で、親友はこう呟いていたという。

「あいつはあの世でもきつと適当に楽しく暮らしていくだろうな」

ここは、神が創り出した異次元。一人の人間のために作りだした場所。名を「創造添付の間」という。ここでは、魂にあらゆる付加価値をつけることを可能とする。付加価値とは、幸運であったり出会ったあたり美貌であったり才能であったり様々だ。そこには一つの軒家が存在した。和式の軒家で、居間とキッチンとお風呂と寝室そして客間にトイレだけを持つあまり大きくないもの。その居間にて正座して自らが呼んだ訪問者をひたすら待っている男がいた。初老の男性だ。大柄で貫録を兼ね備えた武士のような男である。そして、ある青年が玄関の引き戸を開けかの初老の男性の元へと向かってきた。いわずもがな初老の男性が神であり青年が今回被害にあった青年である。

青年川岸涉は自らが異常な方法で死したことを理解していない。なぜか？ 考えれば当たり前のことで、彼は正常な方法での死というものを経験していないのでそれが異常であるとわからなかったの

だ。だからなぜ死した後には自分が神の元へと通されたのかも理解していなかった。だが、なんとなく流れに乗ってその屋敷を訪れた。引き戸を開け中に入ると、ちらりとある部屋に初老の男性が座っているのが見えた。恐らくそれが神であると踏んだ青年は迷わずその部屋へと入った。初老の男性これ以降神と呼ぶが神は青年の姿を認めるとちゃぶ台を挟んで自らの正面に青年を座らせた。そして、彼が座ったのを見計らうと静かに話し始めた。

「どうも、君は川岸涉殿で間違いないね？」

「ええ、あなたは？」

「死者の輪廻転生を管理していたものだ。一般的には神と呼ばれている。すまない、自分から名乗るべきだったな」

「いえ、おきになさらずとも好いです。して、私はなぜここに呼ばれたのでしょうか？」

「うむ……私が君を殺したからだ」

「それは……あなたはつまり死神ということですか？」

「いや、君の考えているようなことではない。何の理由もなく、神という職故でもなく正真正銘私が君を一個人として殺したということだ」

「……理由を聞いても？」

「もちろんだ。少し長くなるがいいかね？」

「はい」

「神というのは先ほどちらりと話したが死者の魂を管理する職である。そして私はその職を長い間努めてきた。しばらくその職を続けたところで私はあるシステムを完成させた。それは人工知能が死者の魂を自動で管理してくれるものだった。それにより私の負担は減り、システムの監視や転生先の確認のみをするだけでよくなった。いままではそれで万事うまくいっていたし、効率的になっていたいいことばかりだった。だが、今回システムがバグを起こした。その結果君が死ぬこととなった。本当にすまない」

「えっと、なんとなく言いたいことはわかりましたし、あなたの落ち度で私が死んだということもわかりました。それで、私をここに呼んだ理由は私に謝罪するためですか？」

「もちろんそれもあるが、もうひとつ。わたしに償いをさせてもらえないだろうか？」

「……償いですか？」

「ああ、君をほかの世界に転生させたいとおもっている」

「先ほどの話ですと、黙っていても私は転生するのではないのですか？ それとも他の世界に転生というのが償いなのでしょうか？」

「聡い君は。いや、すまない。説明が足りなかったな。現在君は輪廻の輪から外れている。ああ、もちろん戻すことはできる。しかし、私が言っているのは輪廻の輪に戻すことを言っているのではない。聡い君なら分かっているかもしれないが、任意の世界に任意の条件で君を転生させたいと思っている。そのほか願いがあれば可能

な限り叶えたいと思っている」

「でしたら、元の世界に死ぬ直前の状況で戻してください」

「無理だ。本当にすまない」

「では、家族に伝言を」

「それも無理だ。重ねてすまない」

「薄々わかっていましたからいいです。では、質問です。元の世界の過去に私を転生させることは可能ですか？」

「そもそも元の世界に転生させることは恐らく君が求めるであろう条件では無理だ。記憶を持ったままではな」

「そうですか。では、どんな選択肢があるのですか？」

「科学の発展した世界、魔法の発展した世界、群雄割拠の世界などに転生することを勧める。記憶なしであったなら、元の世界にも戻れる。ただし、家族のもとに転生させることはかなわない」

「では、魔法の発展した世界に行かせてください」

「わかった。理由を聞いてもいいだろうか？」

「魔法というものを使ってみたいのと、なまじ科学があるとホームシックになりそうだからです」

「そうか。ほんとに君は賢い」

「では、これから転生させてもらえるのですか？」

「ああ。だが、転生するに当たって何か願いはないかね？」

「願いですか？」

「そうだな……例えば不老不死になりたいだとか、性別を転換したいだとか、特殊な能力が欲しいとか」

「そうですね……少し考えさせてくれませんか？」

「もちろんだ。時間は無限と言っているほどある。ゆっくり考えてくれ」

青年は考える。生前呼んでいたネット小説などでよく神のミスで死し最強の身体で転生するというものがあった。まさか、自ら体験することになるとは思わなかったが。神は子供でも美女でもない点はこの現実であるからだろう。願いと言ったがいくつ叶えてくれるか気になった青年は神に聞いた。

「願いはいくつ叶えてくれるのですか？」

「うむ、多すぎても君が困るだろう。そうだな、六つ程にしよう」

「わかりました」

「増えても一向に構わんよ」

「はい」

青年は魔法が使える世界に転生できるとあって、あまり特殊な能力に執着がなかった。どういった魔法があるかは分からないが、たいいていのはできるのではないだろうか？　そう考えていた。すでにこの時点で青年は道への期待を大きく胸に抱いていた。ふと、神が話しかけてきた。

「時に涉殿君を転生させる世界では魔法といっても主に七つしかない。聞きたいかね？」

「参考程度に……」

「ふむ。身体強化、属性魔法、浮遊魔法、付加魔法、治癒魔法、召喚魔法、転移魔法だ」

「召喚魔法とは？」

「うむ、異世界のものを召喚する魔法だ」

「無理やりですか？」

「残念ながら、その通りだ」

「そのような世界行きたくありません」

「だが、そこには君と同じ世界のものが二人おるぞ？」

「この際、未練を残したくありません」

「そうか。では、召喚魔法のない魔法の世界にするか」

「そうしていただけると幸いです」

「考えが回らずすまん」

「いえ」

「その世界には、属性魔法と無属性魔法と種族固有魔法がある」

「単純そうですね」

「そうかもしれん。また、多くの種族が存在しておる」

「エルフなどですか？」

「じゃな」

「ふむ、私は何の種族に転生させてもらうのでしょうか？」

「何でもよいぞ。その世界には、たしかエルフ、龍人、人間、吸血鬼、淫魔、ドワーフ、鬼、獣人がいたはずだ」

「それはまた……各種族の特徴は何でしょう？」

「うーん、特徴とな。多すぎて混乱するじゃろうからお勧めを言おうか」

「それもそうですね。では、どれがお勧めですか？」

「龍人だ」

「なぜですか？」

「まず、この種族は長命で頑丈そのうえ誇り高く慈悲深い。才ある者は種族に関わりなく受け入れる。繁殖力は低い。そして何より空が飛べる。ただ、使える魔法は龍化とドラゴンブレスと半龍化のみだ」

「なかなかロマンある種族ですね」

「さらにだ。君に限って言えば、魔法を使えるようにもできる。不老不死にもな」

「なるほど」

「さて、龍人にするかい？」

「ええ、そうですね。お願いも決まりました」

「聞こうか」

「不老長寿にしてください。寿命はそうですね龍人の約三倍ほどで」

「不死でなくていいのかな？」

「結構です。ただ、これは無理かもしれません」

「言ってみてくれ」

「転生を繰り返したいのです。その世界で」

「むう……最初からいじれば何とかなるか？ 元の世界には戻せぬがそれなら何とかしよう」

「ありがとうございます。では」

「毎回龍人でいいのかい？」

「え？ ああ、では淫魔以外全種族経験したいです。その際も不老長寿で」

「安心してくれ。願いは魂に刻まれているから」

「はい」

「ただ、転生は今回を除いて六回まででいいかな？ 最後は不老不死にするから」

「ええ、では最後は人間にしてください」

「わかったよ」

「傲慢な態度で申し訳ないのですが、全魔法の才能が欲しいです」

「それは、願いに入れなくても保障するよ。魔力量も莫大なものにしてよう」

「ありがとうございます」

「当然の処置だ」

「では、伴侶を不老長寿にする能力が欲しいです」

「一つの生につき六人まで可能にしよう」

「あとは、そうですね超強力な復元魔法と転移魔法と探査魔法が欲しいです。出来れば予測魔法も」

「わかるよ。それらすべてで一つの願いとして許可しよう」

「ありがとうございます。残っちゃったな……結界魔法、肉体改造能力、武術の才が欲しいです」

「すべて許可する。せつかくだ、危険察知の能力と幸運と劣化再生能力を与えよう」

「ありがとうございます」

「いやいや、こちらこそ償いにつき合わせて悪いね」

「いえ、許しますよ。あの、助けてほしい時質問してもいいですか？」

「ん？ ああ、君にはサポートの妖精と獣をつけよう」

「お供ですか？」

「似たようなものだ。残念だが私と会話はできないよ」

「残念ですが、おねがいします」

「うむ。では、これでいいかな？」

「はい」

「では、新たな生を謳歌してくれると嬉しい。じゃあ、さようなら」

「はい、いってきます」

青年が光に包まれ消えた後、神はその生涯を閉じ石像となった。

第二話 神と人（後書き）

地の文が少なくて済みません

第三話 少年時代（前書き）

ずばばと彼の少年時代をまとめました。

第三話 少年時代

（水の中だろうか……転生というのだから、羊水の中なのだろうが龍人も哺乳類なのだろうか？）元青年現在胎児はそんなことを考えていた。そして、そんな腹の中への彼にどこからか話しかける存在が。その存在とは彼のサポートとして生み出された妖精エルフィである。ほっそりした身体に少し大きめのお尻と胸、純白の羽をもつ彼女は落ちていたおっとりした声で彼に話しかけた。

「どうも、はじめまして涉様。私妖精のエルフィと申します。今この時より貴方様にお仕えすることとなりました。至らない点も数多くあると思いますが何とぞよろしく願います」

（ああ、よろしく。しゃべれないから、伝わらないかな？）

「いえ、私どもは魂でつながっておりますのでテレパシーが可能でございます」

（獣の子は？）

「いずれ連れてまいります」

（その子もテレパシー出来る？）

「はい、最も彼も私も万人とテレパシーできますが」

（すごいね。ところで、ここは羊水の中だね？）

「はい、間もなく生まれます」

(ん? そうかい、ではがんばるよ)

「ご武運を」

青年は今この時を持って赤子となり、異世界に転生した。大きな産声を上げ、その美しい容貌を外界に晒して。最初にその姿を見たのは、医師と看護婦そして龍人の父とエルフの母である。そう、彼はハーフとして生まれた。時を同じくして、隣の部屋では吸血鬼の父と淫魔の母に奇跡的な確率で長女が生まれていた。この繁殖能力の極めて低い夫婦に長女が生まれたのは神の奇跡か神の悪戯か。とにかくとてつもない幸運であることは確かであった。

彼の父である龍人は名をギルドラといい、母であるエルフは名をユイアと言った。ギルドラは凛々しくも勇ましい風貌とそれに見合った実力を備えた騎士であり、ユイアはエルフにしては大きい胸とすらりとしたスタイルの幻想的な美女であった。その子供であるルイと名付けられた涉は、神秘的な美しさを纏った男の子であった。

ルイには、同じ日に同じ病院の隣の部屋で生まれた幼馴染がいる。吸血鬼ベルセントと淫魔リムの娘で名をレーナという。彼女は、氷のような美貌を持つ父と妖艶で官能的な美貌を持つ母から美貌を受け継いでおり将来が大変楽しみな存在である。

さて、ルイは生まれてからしばらくの間レーナとばかり遊んでいた。というか、レーナしか遊ぶ相手がいなかった。なぜか、それは同年代の子供が周りにいなかったからというのももちろんある。しかし、一番大きな理由は二人が離れようとしなかったのこの二人があまりにも異常だったからだ。鬼才とでも呼ぼうか? 二人は三歳にして魔法を使いながら遊び始め、五歳になるころにはどちらも

神童と呼ばれるようになっていた。少し手ごわい魔物程度なら簡単に倒していたのだ。そんな二人だが、七歳になるまでは常に一緒に訓練をしていた。しかし、ある事実が発覚する。その事実とは、ルイの異常性。レーナは天才だった。それも数十年に一人といった類の。だが、ルイは違った。世界史上最高の天才であったのだ。

それは、七歳の時ルイとレーナが二人で森へ遊びに行っている時だった。二人はいつの間にか多くの魔物に囲まれていた。その数、数百。いかに神童二人といえども、勝てる道理はなかった。だが、ルイは怯えるレーナを背にしてその数百の魔物を葬ったのだ。しかも、レーナに眠りの魔法をかけトラウマを残さぬようにして。

その時のルイの様子をたまたま賢者が水晶玉で見ていた。それは圧巻だった。ルイはまずレーナを眠らせると、七つの魔法陣を同時展開して、周囲の魔物どもに龍族固有魔法ドラゴンブレスを放った。それだけでは飽き足らず、エルフ族固有魔法水の精霊魔法アクアウエーブを自分を中心に展開した。残った空中の敵に向かって、落ちていた石をなげ消し飛ばしたのだ。その際使ったのが、身体強化の魔法。そして、圧巻が騒ぎを聞きつけ龍の姿で飛んできた父を敵と誤認してその場で龍化し六重魔法陣を展開したうえでの高威力ドラゴンブレスからの四属性混合精霊魔法フォースエレメンタル、そして半龍人化し龍の姿をした父を森へたたき落とした。また、その間ずっとレーナを守っていた結界魔法はこの世界には存在しないものであった。

これを見ていた賢者がルイの危険性を考えて自らのもとで修業させたのが七歳からの八年間であった。その間、ルイは一度も家に帰らず手紙すら送らなかった。なぜなら、ルイは八年間賢者の張った結界の中でひたすら命をかけたサバイバルや修業を行っていたのでそんな暇がなかったのだ。何より、賢者がそれを許さなかった。未

熟なお前では周囲を危険にさらすと言って。まあ、両親には修業風景を記録した水晶を時折賢者が送っていたようだが。

余談だが、この賢者は神がルイのため用意した人材でルイに力の制御を学ばせるための存在だった。その事実を知った為ルイは八年もの間黙って訓練につきあったのだ。神が死んだというのを聞いたのは、ルイが十歳になった時だった。

そんな彼も今日で十五歳。賢者から一人前の認定をもらい、家に戻る許しを得た。ルイは神によりもらった力も賢者のもとで鍛えていたので、超遠距離転移をおこないその日のうちに実家へと実に八年ぶりに帰った。そして、ベルを鳴らし家のドアを開けたのは八年ぶりに会う絶世の巨乳妖艶美少女へと成長した幼馴染であった。

第三話 少年時代（後書き）

決してめんどくさかったからではありませんよ？

第四話 幼馴染の暴走（前書き）

ふむ……方向性が定まりません

第四話 幼馴染の暴走

ルイを出迎えた幼馴染レーナは、一瞬目を見張りそして抱きついてきた。同じ年の女性としては、少なくとも前世ではお目にかかることのなかったほど巨大な胸を押しつけられたルイは年甲斐もなく焦ってしまった。だからだろうか、彼女が泣いていたのに気付かなかったのは。ルイは彼女に続き自らの両親と彼女の両親に出迎えられ、部屋へと案内された。その間ずっと、彼女はルイの手を離さなかった。ルイもまた離す気はなかった。

ルイがソファ―に座ると、レーナはルイの膝の上にまたがり抱きついてきた。男冥利に尽きるが、肉体は十五歳である。問題は山積みだった。それをレーナも察したのか、悩ましげな声を上げ身体を震わせたが何とかベストポジションを見つけたようですぐに落ち着いた。そのベストポジションは、ルイにとって嬉しくも厳しいものであった。

さて、レーナをそのままにルイは先ほどからニヤニヤこちらを見ている糞どもではなく、生温かい視線を送ってくださいている四人の方々と八年にわたる苦行の日々やレーナの日常など様々なことについて話した。時折、レーナの髪を撫でたり耳元に囁いてやるのは忘れない。そのテクニクは、八年の内にエルフィによりルイへと強制的に授けられた。

話が一段落したところで、ルイは両親から今後の身の振り方について尋ねられた。というのも今現在ルイは学校へと通っていない。しかし、一般的な十五歳の青年は学校に通っている。学院と呼ばれるものだ。ただその学院に今から入ったとしても後半年ほどで卒業である。なので迷っているのだ。

「ルイお前の考えはどうだ？」

「俺は半年でもいいから学院に行きたいな。それで、卒業したら独立魔法学院の入試を受ける」

「決めているのね。わかったわ、ではすぐに手配しましょう」

迷っていなかった。父と母を前にして毅然とした態度で自らの意見を言ってみせたルイ。すぐに準備は整えられ翌日から学院へと登校することになった。本来編入試験があるのだが、賢者の弟子にそんなものは必要なかった。師の名前それを告げただけで合格にされ、クラスもレーナと同じにしてもらえた。

「さて、下準備も済んだことだし夕飯までは二人きりで部屋にこもっていなさい」

「レーナ、私の娘なんだからすることは分かっているわよね？」

「ルイ据え膳食わねば何とやらだ。男になって来い」

「ルイ君になら娘を安心して任せられるよ。レーナ吸血鬼と淫魔その両方の欲求を思う存分晴らしなさい」

思い思いの言葉をかけられたルイとレーナは黙って二階のルイの部屋へと赴いた。そこにはベッド（なぜかダブル）と机（上には淫魔大全とかいう図鑑という名のエロ本が）とテーブルしかなかった。まあ、子供のころにはこんな部屋はなかったのだから当然である。しかし、それにしても片付いている。それに、布団がつかわれた形跡がある。具体的には、青い枕の横にピンクの枕がありそれが青に

比べてしぼんでいる。今までずっとだんまりをとおしてきたレーナがルイの手を離してベッドに腰掛けて、言った。

「ルイ……一緒に寝よ？」

「なぜか今までパジャマだった理由はやはりそういうことか」

「うん、それで」

「少し待ってくれ。すぐ寝間着に着がえる」

ルイはレーナの前で堂々と服を脱ぎ、ジャージに着替えた。その間レーナは彼を視漢していた。そして、鼻息もかなり荒くなっていた。普通は逆の様な気もするが、この際どちらでも同じことだろう。着替えたルイは布団に入りレーナを手招きした。レーナは待ち切れないとばかりにもぐりこみルイに抱きつき足をからめて……少女は大人になり、少年は骸となった。あえて言おう、ルイはレーナに二つのものを絞りつくされた。

そもそも、吸血鬼と淫魔にとって血液や精液は嗜好品である。しかし、どうにも抑えの利かない一種麻薬のようなものでもある。ただ、彼らにとってそれは百利あって一害なしのものである。なぜならその行為は、彼らにとって直に魔力を補う手段であるし、食事の代わりにもなる。何より美しさを磨くことと同義である。それを摂取することで彼らは強く美しくなるのだ。

だいたい、吸血鬼は十歳で淫魔は十二歳で吸血・吸精衝動が始まる。力の強いものほどその衝動が始まるのは早く、衝動も強い。レーナはどちらも八歳で始まった。しかし、一切その行為を行っていない。理由は一つ。はじめてはルイがいいから。しかし、この気持

ちは八年間で大きく変わった。どう変わったかというところ変わったのだ。ルイでなくては駄目だ。

つまりは、夕食が始まるまでの三時間レーナはルイに奉仕による奉仕を重ねその代償として血と精を多量に受け取ったのだ。三時間後ルイはもはや骨と皮だけの存在になり果てていた。それを発見した大人たちにより無理やり食事を食べさせられたルイは何とか復活したが、彼が簡易再生能力をきわめていなかったらいくら不老長寿とはいえ次の生涯を始めていただろう。この日の夜、ルイは人知れず肉体改造能力を使用し血と精液の生産速度と濃度を常人の十倍にした。また、タフな身体にも改造した。レーナからの行為に耐えるために。その結果毎日三回朝夕晩味をしめたレーナによって奉仕され摂取されることになる。仕方のないことではある、最高の量最高の質を最高の相手が提供してくれるのだ。しかも、そのどちらも日に日に向上していている（ルイが毎晩自分の肉体を改造しているため）。それに七年も我慢してきたのだからその反動もあるのだろう。

さて、その日は夕食前に一回一緒にお風呂に入っていたときに一回寝る前に一回絞られ死んだように二人は寄り添って眠った。顔の血色は対照的だったが。翌朝、レーナの美貌とスタイルが劇的に変化していた。もはや絶世の美少女という言葉は生易しく、傾国の美女いや……もう、あれだった。スタイルも見たものすべてが生理的反応をしてしまうほどだった。家族はしなかったが。ちなみに、朝の一番搾りをすでにルイはレーナによって絞られている。

この後、二人で学校に登校したのだがレーナが歩くたびに男は皆トイレに向かって前かがみで走って行った。学校に着いてからは、男子生徒が皆トイレ前でズボンを汚し屍と化していた。この騒動は、レーナに校長（女）が封印の腕輪をつけさらに変身魔法で前の姿に

するまで続いた。因みに男性教諭は皆腕に引っ掻いたような跡があったが何があったかは永遠にわからない。

あと、なぜか女子生徒も次々にパタパタと倒れて行った。ルイの美貌もまた人を狂わすたぐいのものであったが、ルイは最後まで気づくことはなかった。それに、ルイのあれは慣れれば何とかなかったようだ。授業は一時間遅れで開始され、忘れ去られていたルイは三限目にクラスメートに紹介された。避けられない事実として、レーナの幼馴染ということはすぐに全校生徒に広まった。もちろん、ファン？ 楽部などとルイはその日の内に激突し、ルイが勝利した。三限までの間ルイが何をしていたかというと校長に気に入られずと話相手をさせられていた。

第四話 幼馴染の暴走（後書き）

見にくくてすみません

第五話 学校の生活と学院入試（前書き）

いまだ方向性が決まらない

第五話 学校の生活と学院入試

ルイ初めての登校は、波乱に満ちたものだった。授業は逆に賢者のもとで育ったルイには酷くつまらなく簡易なものだった。ただ、彼は転生して以来レーナ以外の同年代のものとの関わりがあまりなかった点では非常に有意義な時間を過ごせたようだ。また、放課後のレーナファン？楽部とのじゃれ合いは中々愉快なものであったらしい。ただ、ルイは一日中機嫌の芳しくなかったレーナを気にして胃もたれしてしまったようだ。

家に帰った後当然のように一層激しい搾取行為がレーナにより執行されたのは言わぬが花であろう。

さて、翌日からのルイの生活はなかなか楽しいものであった。元来美しい容姿で異性の注目を勝手に集めるルイは女性とも安易に仲良くなれた。ただし、レーナの無言の妨害に耐えきった猛者しか彼のもとにはたどり着けなかったため強気な女性ばかりが集まった。また、授業中の華麗なルイの戦闘を見て男子連中も好感を持って近づいてきた。無論レーナにお近づきになれるチャンスと考えたものが多かったが。こんな感じで男女とも仲良くなった彼は、残り半年を十二分に謳歌した。まずは最初で最後の文化祭。これでは、演劇の王子役をルイがして姫役はレーナがかっさだった。この二人の美貌と少々いきすぎな演出が大きな反響を呼び大盛況のうちに幕を下ろした。次に魔法大会では様々な魔法を使った競技が開催され多くの観客を招いて盛況の中執り行われた。流石にレーナの人気は高くカメラ小僧がレーナが出るたびにシャッターを多く切っていた。ただ、ルイに関してはそれ以上の女性によりサインをねだられたり、セクハラを受けたりしていた。そんなこんなで楽しく魔法大会は終了した。最後には卒業式と同時に決闘大会が行われた。決勝にて昨

年優勝者のレーナをルイが破り優勝した。こうして、わずか半年とはいえ充実した学校生活を終えたルイはレーナと共に独立魔法学院の入試を受けに来ていた。

入試日多くの若者たちがまず筆記試験を受けさせられた。翌日、心理テストの様なものも面接形式で執り行われた。最後に、その両方に合格した者が後日通知され今日とある広場に集められていた。そして、多くのものが不安な表情を抱えている中大柄で筋骨隆々な中年男性が現れた。その男性は大声を張り上げその場の者たちの注目を集めた。その男性は皆が注目し静かになったのを認めるとある青年を紹介した。そのものは長身でスレンダーな美形男性エルフであった。とても良く通る声で自己紹介を始めた。

「みなさん、ごきげんよう。私この学院の教頭を務めておりますジャン・F・フラミンゴと申します。見ての通り種族はエルフでございます。年齢は今年で二百五十六歳となりました。さて、皆さんは最終試験まで残った優秀な方々です。しかし、それだけではうちの学院ではやっていけません。内でやっていくのに必要なのは……力と根性だ！うちに入りたいのならはこの試練を突破してみろ。突破できぬものによるはない。君、試験の説明を」

先ほど大声を出し皆を黙らせたものが再び壇上に立ち試験の説明を始める。

「試験は二つの段階で行われる。第一段階は、仮想世界での一週間の生き残り。ただし、ただ生き残るだけでは合格にならない。仮想世界に数多く存在する魔物それを各自三種撃退せよ。組んでたたかうが、個人で戦おうが勝手だ。とにかく三種討伐せよ。小型・中型・大型だ。第二段階は、残ったものの総当たり戦。勝敗は加味しな

いが、全敗したものは不合格にする。以上」

「聞きましたね？ 皆さん。戦える準備をして来いと事前に伝えてあるはずですが、そうですね二時間待ちましょう。あらゆる準備をしてきてください。また、仮想世界といえどそれはこちらと何ら変わりありません。身体ごとそこに転移されますし、食料もそこで取ってもらいます。最低限の装備は希望者には差上げます。ああ、学生同士殺し合ってもいいですが、あまり無意味に殺戮を行われますと職員が殺しにいきます。では、二時間後」

話を聞き終わった若者たちは我先にとデパートや市場へとかけて行った。また、供給される装備をもらい中身を確認されるものも多かった。しかし、三割ほどのものは黙ってゆっくりと広場を後にした。様々な行動をとる若者たちを見て教師たちは何を思うのか。すでに、最終試験の火ぶたはきって落とされた。

ルイは隣にいるレーナと二人二時間をどう使うかと話し合っていた。二人は、大概のものは準備してきていた。武器に救急セット、お菓子に弁当など。ただ、テントや寝袋料理器具といったサバイバルのための装備は流石に持ってきていない。

「ねえ、ルイどうする？ サバイバルなんて言われても私たち何も分らないよ？」

「サバイバルは、経験してるしさっき向こうが用意してる装備もらった奴がそれを広げているのを見たが、まあ寝袋とサバイバルナイフに薬草図鑑と火元、救急セットはあった。焦る必要はない」

「そうなんだ。じゃあ、なににする？」

「服でも換えに行こう。長袖長ズボンとかをな」

「わかった。さすがに、ミニスカートじゃね？」

「あそこで、学校側が今の服と交換してくれるみたいだ」

「わかった」

ルイは、まんま迷彩服を今の服と交換してもらい、レーナは下着からいろいろ交換してもらった。

「似合ってるぞ」

「ルイこそ」

二時間後、広場に集まった若者三百名が一斉に仮想世界へと転送された。

第五話 学校の生活と学院入試（後書き）

こんな感じです

第六話 謎の爆乳美少女

ルイは気づくと森の中で一人でいた。普通なら知り合いと再び出会うのは大変だろう。しかし、ルイには裏技がある。探査転移魔法を使えばレーナをサーチしてレポート出来る。だが、ルイはそれをしない。事前にはぐれた場合はお互い一人で少なくとも二日は過ごそうということにしていた。これは入試であるからして、自分ひとりだけでの力を試したいというのもあったしこの世界とはまた別種の魔法を使うことに抵抗を感じていたこともあった。まさか、不合格にはならないだろうがいろいろと聞かれることにもなるだろう。まあ、賢者の弟子ということですからすべて解決できてしまうだろうが。

仮想世界に転移させられてから三分ほどたった頃仮想世界全体にアナウンスが流れた。

「仮想世界に皆たどり着いたようだ。いくつか言い忘れたことがある。まず、あまり複数で固まっていると魔獣が多くやってくるので注意するように。具体的には五名以上で長くいると、おおよそ二時間で魔物が寄ってくるぞ。ああ、それと参加者の中にこちらの関係者が紛れている。あまり、むやみに参加者同士で戦うことはお勧めせんな。以上」

徒党を組むな、あまり迂闊に人間と戦うな。まとめればこの二点。単純でわかりやすい説明である。入試であるのだし、このシステムから言ってあまり大人数で組むことを許すと入試という制度が破たんしてしまうのだからこの処置は当然であろう。ルイは、アナウンスを聞き終わると森の中をひたすらに探索した。まあ、これでもまだ十五歳。冒険好きなお年頃だ。途中小型や中型の魔物が彼を襲ってきたが、はつきり言って話にならなかった。

まず、最初に出会ったのはオオカミのような魔物の集団であった。なるほど、野生の生物らしく賢くもたくましい戦いぶりだったがルイはサバイバルナイフのみを使って切り捨ててしまった。その数、十匹。残りは怯えて逃げてしまった。次に襲ってきたのは羽を四つ持った蜂のような魔物でこれまた数匹でかかってきた。これに対しルイは、石やら木の枝やらをぶつけ簡単に撃退した。次に出てきたのは、身長三メートルはありそうなスライムだった。ただし、身体は銀色にてかっている。スライムには半端な物理攻撃は聞かない。それに、この種は大概の魔法に耐性を持っている。かなり、厄介である。普通は。ルイは、三重魔法陣を展開しドラゴンブレスをそのスライムに放った。スライムは木っ端みじんに消し飛んでしまった。その後も五、六匹処理した。

さて、そんな中複数の人間が一人の爆乳美少女を囲んで何やら陰悪な雰囲気になっていた。ルイはそのスタイルから見てレーナと確信し助太刀に入ろうとしたが、その前に囲んでいた人間たちは皆氷漬けになった後、そのまま切り裂かれた。ルイはそれを見てレーナでないことに気づく。レーナは氷の魔法を使えない。

では、誰なのか？ ルイは興味本位でその少女に近づく。すると、その少女はルイに手に向け鋭く警告した。

「あなたもく化け物と呼ばれる私をつぶしに来たの？ 見たでしょう？ 先ほどの様になりたくないのなら、去りなさい」

普通のものなら、それこそレーナクラスの実力者以外ならすぐさま腰を抜かし醜態をさらしたであろう程の迫力をその少女は放っていた。しかし、ルイは挑発的な笑みを浮かべ少女に近づく。少女は軽く眉をひそめるとためらいなく、氷漬けにする魔法を放ち、続け

てかまいたちの様な魔法を放った。

「馬鹿ね」

「そうでもないさ」

平然と少女の魔法をルイは防いでいた。その光景が信じられないのか、少女は目を見開き咄然としていた。逆にルイは、少女を気に入っていた。ルイのタイプは背中中の任せられる爆乳美少女だ。少女は完ぺきだった。

「……いるものね。私以外にも＜化け物＞が」

「俺から言わせれば、あんたは＜化け物＞とはいえないな」

「気に食わないわ。なめないで」

少女は、氷の竜巻を発生させそれをルイの方へと押しやった。木々が氷の結晶により削り取られ吹き飛んでいく。しかし、ルイはそれを炎の精霊魔法を放つことでかき消した。その圧倒的威力故に。

「こんなもんか？　ならば、軽視されても文句は言えんだろう」

「……みたいね。でも、あいにくと私頑固なの！」

少女は、理性では認めても本能的にはあきらめられないのか近接格闘戦を挑んできた。風魔法による強化で、人外の動きをしている。それを超える動きをルイはしていた。魔法を使わずに。原因は毎日の肉体改造である。

「はっ……はっ……はっ………勝てないわ。好きになさい」

「極端だな。まあ、いいけど」

今度は、素直に負けを認めた少女は、ルイに対し色々な覚悟を決めたようだ。ルイはそれに焦ることもなく、むしろ喜々としてその覚悟を受け入れた。しかし、深く少女のことを知らなければ能力の対象とする事はもちろんないだろう。

第七話 何が起こるか分からない

ルイが謎の爆乳美少女と乳繰り合っている頃、レーナはというと大型の魔物とやり合っていた。周りの木々は倒れ、レーナの服は所どころやぶれている。

「なめてた……こんな強い魔物がいるなんて」

「GYAOOO!!!」

レーナの合い対する大型の魔物とは、翼人とでも呼ぼうか、人型で翼をもった生物だった。しかし、それにしてもあまりに凶悪な外見と力を持っている。鋭い牙、長い耳、口はオオカミのようで目は蛇のよう、身体はまるで鉋物のように硬く爪はナイフのような切れ味。いったい何なのだろうか、俗にいうガーゴイルに近いがその表現でも生易しすぎる。大体、大型といっても節度があるはずだ。このガーゴイルっぽいもの全長がそこらへんの木々の二倍はある。それに、スピードはワイバーンにわずかに劣る程度。防御、攻撃、スピードの点においておおよそ一人の人間が太刀打ちできるものではない。

「逃げるにしても、逃げ切る自信はないし……でも、真っ向から勝てるの？　いくらヴァンパイアの再生能力を持っても流石に死んじゃう」

その高潔な血筋により恵まれすぎた潜在能力を持ったレーナでも、この相手はきつすぎた。しかし、どうにかしなければ狩られるだけ。レーナは未だ不安定にしか使えない種族固有魔法を使ってどうにか倒せないかと考える。

「理性が、ありそうには見えないけど……興奮させて、傷つけて血を奪う。それしかない！でも、傷つくのかな？ 闇魔法ブラックレイ」

レーナは魔法を迫るガーゴイルへと放つ。だが、当然のように全く効かない。それでも、打開策を考えそれを実行する。

「闇魔法グラビデ」

重力系の魔法ならば、奴のスピードを落とせると考えたらしい。その推測は当たっていたようで、奴は空中でほんの少しわずかながらバランスを崩した。これ幸いとレーナは同じ系統の上位魔法を連射する。

「闇魔法グラビデトライアングル！三重魔法陣展開！三連撃」

瞬間的にレーナの背後に三重の魔法陣が三組展開され、そのすべから魔法が放たれた。威力は先ほどのものの二十七倍、使用魔力は八十一倍である。

「GAO！？」

いきなり、多くの重力を受けた奴はその身に計り知れないほどの重力を受け地面に伏した。しかし、それはとっさの環境の変化に耐えられなかっただけ。奴自身にとって、言うほどこの重力は脅威ではない。それを感じているレーナは空かさず次の魔法を準備し放つ。それは、彼女自身もつとも得意とする魔法の一つ。それは、どこか彼女の両親の特技と似ている魔法。

「八重魔法陣展開！！闇魔法トリプルドレイン！！！」

そう、＜吸収＞の魔法。しかも、その系統の中でも上位の魔法トリプルドレイン。これは、敵の魔力・体力・精神力を吸収する。とれる量は術者が込めた魔力量に比例する。これにより、目に見えて敵は弱ってきている。叫び声も小さくなり、重力に対する抵抗も大人しくなってきた。そこで、次の段階に入る。奴の身体を傷つけ血を流させる。その為にきわめて有効な魔法は、レーナは持ち合わせていない。そのため、奴をまず弱らせたのだ。それが、うまくいき、レーナは放つ。

「二十七重魔法陣展開！！！！炎魔法フレイムスピア！！！！くっ……七連撃！！！！！！！！」

魔力を莫大に消費し、効率など無視して力技で威力を上げた魔法をいくつも同時に同じ個所に。その結果、敵は大きな深手を負った。それは、魔力の多くを事前に吸収したため魔力障壁が劣化したために起きた必然の結果だった。もはや、勝ったものとも思われたが彼女は油断なく最終段階の魔法を執行した。

「吸血鬼固有魔法ブラッドドレイン！」

ガーゴイルの傷口から大量の血液が急速に吸い取られていく。それは、レーナの上空に次々と集まって行きそれがとまったときにはガーゴイルは干からびていた。そして、レーナは止めをさす。

「吸血鬼固有魔法ブラッドコントロール……血よ巨大な槍となりて敵を貫け！ブラッドスピア」

もはや、血液の無くなった敵の身体をその血液でレーナが貫く。残ったのは、異常な量の血だまりと干からびた化け物だけ。レーナ

の意外なほどあっけない勝利であった。

「やっぱり、野生の魔物は強い……でも、これで戦い方はわかった。それにしても、つかれたな……」

レーナは、この戦い多くの魔力を消費した。ドレインで敵から魔力を吸収したが、はっきり言ってあの炎魔法につき込んだ魔力はアホみたいな量なのだ。だから、もうあまり魔力は残っていない。なので、彼女は非常に疲れていた。その為、どこか休めるところを探そうと森の中へとゆっくりとあるいていった。

その姿を、監視する二つの影。一つは小さく、一つは大きい。かたや、まったくの無表情で何やら手元を操作している。かたや、嬉しそうな顔で飛び跳ねている。この二人の目的は何か？ それは、今はわからない。

第八話 こんにちは

レーナが、泉の縁で岩に腰掛け待っているとひょっこりと小さな影が現れた。

「安心してください。敵意はないんです」

警戒して、サバイバルナイフを構えるレーナにその幼女はそう宣った。

「私はヨウコ、参加者です」

「そのヨウコさんが私に何の用？」

「実は先程の戦い見えました」

その言葉を聞いて、レーナはあることを考えた。この幼女は自分を利用してしている。自分を利用して、この入試に合格しようとしている。そして、レーナは考えた。自分がこの者をサポートしてあげる義理はない。危ないところを助けられたわけでもないし、何よりこちらにメリットがない。信用できる相手だとわかるのなら、まだお願いすることはいくつかあるだろうが。だが、この時レーナは二つの可能性を自然に排除していた。その二つの可能性は、幼女が自分より強いことと幼女が自分に襲いかかってくることだ。

「それで？」

「戦わせていただきます」

言うが早いのか、少女はレーナに殴りかかった。レーナは軽く受け止められると思ったが、念のため横へと避けた。しかし、少女はその動きについてきた。レーナは少し焦ったが、瞬間的に身をひねり避けた。すると、少女の拳は付近の岩に当りその岩は砕け散った。レーナは、今度は本格的に焦り一気に距離をとる。そして、構える。レーナの納める芸術的な武術＜武炎舞＞の構えである。

炎を、体中に纏い両手を胸の前で合わせ目をつぶって立つ。そのまま、黙って少女が攻撃してくるのを待っている。少女は、二ヤリと嗤うと弾丸のようにレーナに突っ込んでいく。レーナは、素早く美しい動作で少女の身体をいなした。そして、そのまま少女を泉へと突き飛ばす。以上の動作すべては、レーナが目をつぶった状態で行われている。

少女は水面を何度かバウンドした後、くると回転し空中で制止した。レーナは目を開いていないのでそれに気付かない。少女は、腕を組み何事かを考える。そして、おもむろに魔法で水球を放つ。一つ一つの水球は野球の球程だがその数は数十個。スピードも速い。かなりの威力であった。しかし、レーナはやはり目をつぶったまま当たる球すべてを弾き、破壊した。その一連の流れはまるで舞を踊っているようで美しかった。

「かなり、やるわね。では、これはどうかな？　水の精霊魔法アクアキャノン」

半径一メートル程の魔法陣が少女の前に展開し、そこから水の濁流が一直線に放たれた。その水圧は計り知れない。それでもなお、レーナは瞳を閉じたまま。目にもとまらぬ高速で回転し始めると、そこにはレーナを中心に大きさ二メートルほどの回転する熱球が存在していた。そしてその熱球は迫る水そのすべてを弾き飛ばし、軌

道を外していた。まさしくそれは炎のバリアと言っているものであった。

「これさえも防ぐか……勝てないようね。もう攻撃しないから」

目をつぶったまま、構えを解かないレーナ。当たり前だ、こんなこと言われて構えを解くのは馬鹿のやることだ。何の根拠もない。しかし、数分たっても攻撃してこないのを不自然に思ったレーナは炎の球体を六つほど己の周りに浮遊させ、目を開き構えを解いた。

「理由を聞いていい？」

「いくつもあるわ。まず、あなたの力を一方的に利用しようと思っているものでないということ。もうひとつは、戦いたくなかったから」

「私にとって、どちらも満足のいく答えではないし、納得などもつてのほかだけれど、あなたの力は確かにわかったよ。強いね」

「ありがとう。そして、いきなり吹っかけてごめんなさい」

「ふざけてるの？ 許さないよ。一発殴らせて」

「わかったわ。どうぞ」

レーナは身の回りに浮かべていた炎の球を崩し、自らの右手に纏う。そのまま、幼女の元へと赴き、目をつぶり武炎舞の構え。目にとまらぬ右手のツッパリが少女の腹の寸前で止まる。しかし、纏っていた炎により衝撃は確かに伝わり、幼女は泉を超え向こう岸の木へとぶつかった。

「がっ!!」

それを、最後まで見届けたレーナは黙って付近の岩に腰掛ける。そして、脚を組み向こう岸を見らずに背を向けた状態で呟く。

「今ので、許してあげるよ」

幼女は、少し苦しそうだがどうにか立ち上がり浮遊魔法で泉を超えレーナの前に着地する。自分の腹に軽い治癒魔法をかけた後、レーナを見て言った。

「ゆ、許してくれてありがとう。話を聞いてもらえるかしら？」

「うん、いいよ」

「単刀直入に言います。あなたと行動をともにしたい

「断るよ」

「嫌と言われても付いていくわ」

「危害は、加えないのね？」

「もちろんよ」

「なら、そこで野宿するから見張ってて。先ほどの戦闘とあなたとの小競り合いで疲れてるの」

「了解するわ」

意外にも、すぐに了解したレーナはヨウコを見張りに立たせると、大木の木の枝で睡眠を取り始めた。対するヨウコは、レーナの横の枝に座ると手帳を取り出し何か書き始めた。そこには、何やら数字と記号が書かれていた。それらは、何を意味するのか？ 少なくとも今はレーナにはわからない。

第九話 刺客（前書き）

原初は少し待ってください。タイトルは＜中の者＞できまっております。

第九話 刺客

ルイはお供に爆乳美少女を加え、森を闊歩していた。別に爆乳美少女は腕を組んだり、抱きついたりなんかしてないし、ラブってきてもいいない。二人はいたって平穩に過ごしている。ただ、なぜか先ほどから多くの遠吠えが聞こえそれがだんだんと大きくなってきているという点を除けば。

「おい爆乳、これはどういう状況だ？」

名前を聞いておらず、何と呼べいいのかわからないので、ルイは少女を取り合えず身体的特徴で呼んだ。しかも、その部分を凝視しながらそこに話しかけるように。

「……そう呼びたいなら、それでいいけど。名前を一応伝えとく。セツナ」

少女セツナは、ルイにならそう呼ばれても構わないのか、強く反応したりせず、しかしきちんと自らの名前を紹介した。それを聞き、ルイはわが意を得たりと視線を少女全体に戻し、自らの名前も名乗った。先ほどの呼び方と視線は素直に名を聞きにくかったルイの苦肉の策だったのだろうか？

「セツナか、俺はルイ。で、この足音は？」

「狼系の何かが大勢迫ってきているのじゃない？」

セツナの回答を聞き、めんどくさそうに答えるルイ。だが、その答えが予想通りだったのかスムーズに会話を進めるあたり、きちんと

としている。

「やはりなあ……何匹までいける？」

「さあ、はかったことなんかないけど……四くらいなら、三十分は可能よ。数に限らず」

具体的に何匹いけるかなどわからないし、計ったことなどないのが普通であるので、セツナはルイに少し歪曲した返事をする。こういうあたり、セツナもすこし性格がひん曲がっているのかもしれない。

「そうか、まあ俺のもの宣言したんだし四にしても悪くはないが、守られるのは好きじゃない」

しかし、その回答を聞いてルイはあまり良い思いはしなかったようだ。彼のタイプの女は背中の守れる爆乳美少女。なればこそ、自分が守ってもらっただけなどというのは嫌なのだろう。因みに彼の嫌いなタイプは、頼るだけの女や口先だけの女だ。

「じゃあ、殺る？」

「当然そうなるな」

二人が半ば最初から決めていたであろう結論に至ったと同時に、森を駆け抜けてきた巨大な狼の群れが、目の前に現れた。その数およそ百匹ほど。二人にとって大きさがこれほど巨大でなければ、楽に終わらせられる数だが、そうもいかない。ルイはセツナを抱き寄せ、耳元で囁く。

「十匹やれ。残りは俺がやる」

「わかった」

変に意地を張ったりせず、ルイの言うことを素直に聞くあたり、セツナはルイの性格をこの短時間で少しはわかったようだ。つまり、ルイはうざいやつは嫌いなのだ。

それを合図に、二人は体長三メートルはある狼たちの群れへと突っ込む。そこにて発揮されるセツナの実力。彼女は、狼の多く密集している地点に飛び込むと自らを中心に、地面を凍らせる。それにより、狼の脚は地面に凍りづけにされた。ただし、そんなものはこの狼たちには多少強い鎖程度のもので、徐々に脚を固めた氷にヒビが入ってきている。それにあわてることなく、セツナは巨大なつららを空中に作り、それを風の魔法で高速回転させる。数にして十個創造されたそれは、同数の動けぬ狼たちを上から串刺しにした。

一方、ルイの戦いぶりは鬼畜と言っているものだった。各狼の背に転移し、雷神も真っ青の雷を直接狼に叩き込む。あまりの電圧と衝撃に狼たちは背中から吹き飛んでいく。ルイは、七十匹ほどの狼をセツナが十匹しとめるうちに倒してしまった。幸いにも残りの狼は怯えて逃げ去った。

「私が十匹やる間に、七倍の数をやるなんてすごい」

「わけねえよ。ただ、なんだっていきなり俺たち二人を襲ってきやがったんだ？」

「それはですね、ここのルールの一つにあるのです」

素直にほめるセツナに対し、恥ずかしさを隠すように無愛想に答えるルイ。とそこに、いきなりシルクハットをかぶった、スーツ姿の中年が二人の前に現れた。そして、何やらルイの浮かべた質問に説明を始める。突然のことに多少驚いた二人だが、警戒心を持ったまま黙って中年の話を聞く。最初の警告を思い出していたからだ。参加者の中に関係者がいると。しかし、不可解なことにその中年はホログラムのように身体がいびつに透けていた。

「あんた、なにもんだ？」

黙って聞いていなかった。すぐに質問をする。手は出していない。

「申しおくれまして、仮想空間観察役が一人マモルというものです」

「で、ルールってのは？」

「参加者を殺した者には、刺客が放たれるというものでございます」

「それは、一度か？」

「いえ、殺した人数分だけ」

「今回がそれだと？」

「ええ、あなたではなくそちらのお嬢さんなのですが」

「他に言うことは？」

「ありません。では、失礼」

中年の男は、見ていてあまり気持ちの良くない笑みを浮かべると、文字どうり消えた。ルイは、セツナへの刺客ということで今回の件は理解した。そして、思った。セツナといればこの入試、楽しめる。ルイが、チラリとセツナを見るとセツナはうつむいていた。

「何を考えているんだ？」

「迷惑を……かけた」

「大した苦勞じゃない、暇つぶしにすらならん」

「!？」

セツナははっとしてルイを見つめた。そこには、傲慢不遜な顔をしたふてぶてしい美少年が立っていた。ルイはその顔を歪にゆがめて、セツナに近づくと右手をセツナの顎に添え上を向かせた。そして、顔を近づけ鼻が触れ合うと、力強くセツナの眼を見て低い声で言った。

「逃がしはせんぞ？　こんな、トラブルの種を」

生前名を涉といい、転生したのちその名をルイと変えた少年は賢者の度重なる訓練や異世界ということも相まってか多少性格に変調をきたしていた。どこか危険やスリルを求める人間になってしまっていたのだ。セツナはその言葉を聞いて、目を見開いて言った。どこか、呆れたように。

「ルイ、あなた狂ってない？」

「ん？　そうだな、最近そう思ってきたところだ」

どこか、心の奥で見捨てられるのではないかと悩んでいたセツナはとたんにそんな事を思っていた自分が馬鹿らしくなった。そして、再度決心した。この男に着いていくことを。クスリと穏やかな優しい笑みを浮かべた少女は、かわいらしい声でルイへと言った。

「そう……安心して？ 逃げたりしない。むしろ、着いていく」

青年は、意外そうな顔をした後、乱暴にセツナを抱きしめ目を見つめたままニヤリと晒い、少女の美しいお尻へ手を這わせそれを両手でムギュッと握りしめた。まったく動揺しないセツナに向かって悪い声で、挑発するように言った。

「ついてきてみろよ」

その言葉を聞いたセツナは、今度は自分からルイの首に手を回し顔を近づけると少し上目遣いで、握られているお尻に力を入れて言い返した。いや、宣言したと言ってもいい。

「ええ、ついていく。そっちこそ、逃がさない」

第九話 刺客（後書き）

感想くれると嬉しいです

第十話 一日目の終わり

学園内部のある建物のある部屋で、一人の中年が一人の青年に報告を行っていた。

「教頭、先ほど二十四時をまわりましたので、定時報告を。現在リタイヤしたものは全体の二割程で、ブラックリストに載ったものが二十三名です。そして、刺客を退けたものが一組であの方の眼鏡にかなったものが一名です。また、一組参加者……いえ、男性参加者狩りを行っている少女と少年がいるらしく対応に困っているのです」

「なるほど、粒がそろっているようですね。面白くなりそうで、うれしいです」

「はあ……（放っておけということか）」

詳しくそれなりに正確に報告したマモルに対し、見当違いな反応を返す教頭。それに対し、少し自分の存在価値を再確認しながら、どこか呆れた表情をしているマモル。上司に翻弄される不憫な部下その図式がそこにはあった。

「しかし、どんな刺客を何名で退けたのですか？」

「二名で、八十匹の巨狼を殺し二十八匹を退けました。因みに、あの方は吹き飛ばされて一撃も加えられなかったとか。また、狩人の方は討伐に向かった教師二名を返り討ちに」

「……………何ですかその刺客は！？ そんなもの………そういえば、

十名以上殺した者にはそんなものを用意していましたね。あの方が、吹き飛ばされた？ 吹き飛ばした人にはぜひお礼を言いたいですね。あのガキいつもいつも迷惑なことばかりしやがって。事後処理誰がしてんだと思ってんだ？ 有事の際にしか動こうとしねえし、大体なんだあの体型？ ロリか、永遠のロリか？ 糞、消えればいいのに。狩人ですか、まあそっちは今後システム上の刺客だけいいですよ」

「……はい」

マモルは正直に言ってドン引きしていた。そして、彼は今まで信じていたのだ。自分の上司は、少し変なだけであの校長や理事長に比べれば何倍もまともで素晴らしい人なのだ。しかし、その幻想は打ち消された。教頭自身の頭のねじが二、三個吹き飛んでしまったようなコメントを聞いて。

「あと、六日……果たして何人残るのやら」

「（こええええよ、この人）」

何もなかったように会話を締めくくった教頭に対しマモルは恐怖を感じた。もうそれは、街中で奇声を上げながら全裸で全力疾走する人いきなり声をかけられたようなものであった。しかしこれで、不穏で無責任な一日目の報告劇はここに幕を閉じた。

レーナは、木の上で眠っていたのだが、夜中遅くに目が覚めてしまった。隣の枝で、見張りを律義に続けているヨウコに気づき、レーナは話しかけた。

「ヨウコもう疲れたのなら、休んでいいわよ？ 私はどうぐっすり

寝たから」

「……………」

「ヨウコ？」

ヨウコは、起きているように見えてその実熟睡していた。レーナは、その幼い寝顔を見て穏やかに息を吐いて自分で見張りを始めた。

「ルイとの合流まであと少しだけれど、この子どうしよう？」

少し幼女に情が移り始めていたレーナは、そんなふうにも一人呟いた。殺伐とした、深夜の危険な魔獣の森、そのなかで少なくとも二人の女の子がいるそこには平穏な時間が流れていた。

一方、その頃ルイはセツナの張った氷の結界のなかで二人並んで寝ていた。隣には絶世の美少女、しかも爆乳で自分に好意？を抱いている。そんな状況ならば、反応は二つしかない。緊張して眠れないか襲うか。だが、ルイはそのどちらでもない反応をしていた。なぜか？ レーナと再会してしばらくルイは彼が今現在おかれている状況よりもさらに高待遇の状況に置かれていた。そのため、慣れていたのだ。また、彼の中で相手が何と言おうと一七歳までは襲わなという信念があったのが原因でもある。ちなみに、この信念はハーフの親を持つとかなりきつく授けられるものでそんなに珍しくはない。襲うとは、いわゆるくコウノトリを呼ぶ行為のことである。

「……………ルイ揉むのはいいのだけれど、寝れないからまた明日にしてくれない？」

「ん？ ああ、気がきかなくて悪かったな。わかった、また明日に

する」

無論、ルイはコウノトリは呼ばずともコウノトリを呼ぶ準備やコウノトリを搜索する行為にまっただためらいはしなかった。つまり、俗に言われるセクシャルハラセメントはためらいなくやってのけていた。重ねて言うが、彼は頑固できちんと信念を貫く自分に正直な原始的な漢である。もちろん、彼がこんな行為をするのはセツナとレーナくらいではある。今のところは……

揉むのをやめ、腕枕をしてやるだけにしたルイはもちろん緊張することもこれ以上襲うこともなくすぐに爆睡し、セツナもためらいなくルイに身体を預けて就寝した。一日目にして、異常なほど仲の良くなった二人。これを、普通の物語のヒロインが見かければめんどくさいことになるだろうが、きつとレーナが見てもたいして動揺しないだろう。彼女は淫魔の血を引いているのである。独占したいとは思っても、浮気された程度では全然怒らない（実は、未だ恋人でないので浮気ではないのだが）。矛盾しているがそうなのだ。また、逆に浮気も平気です。浮気をしない淫魔は極稀で、ある条件を満たせたものたちだけだ。基本的には、どこにでも変人はいるものなので、もしかしたら例外もあるかもしれないがおおむねそれで正解だ。

さて、一日目の夜はこうして過ぎていった。

なんの問題もなく。

第十話 一日目の終わり（後書き）

一気に最終日とかでもいいですね

第十一話 アキラとメルの大暴走劇

森のある広場で、三人の青年と二人の男女が言い争いをしていた。三人の青年の方は嫌みそうなりダーとあまり人相のよろしくない大柄なものが二人で男女二人の方は女性は素晴らしいスタイルをした気の強そうな美少女と平均身長ほどの平凡な少年だった。

「ちょっと、アキラやめようよ！ 参加者同士であまり戦うなって言われたじゃないか！」

「うっさい！ メルあんたは悔しくないの！？ あんたは、馬鹿にされたのよ！！！」

「馬鹿になどしていませんよ。ただ、足手まといを連れて歩いているとは美しい外見に似合わず酔狂な方ですねと申し上げただけです」

「それが馬鹿にしてるって言うてんのよ！！！！ メルは、強いんだから！」

「ふう、すぐにわかる嘘を言うのは滑稽ですよ？ その弱気な青年にそんな力があるわけないでしょう？ レディ、私たちと共に行動をしませんか？ 魔物はグループが四名までなら寄ってきません。ですから、私とこちらの二人とあなたでちょうどいいでしょう？ 残念ですが、私どもは弱者を仲間にする余裕はありませんのでその青年には申し訳ないですが……」

「お断りよ！ さっきから言うているでしょ！ 消えて！」

「おやおや、これは手厳しい。仕方がありません……無理にでもつ

いてきていただきました。あなたは気が強く美しい……調教のし
がいがありそうだ」

嫌みな顔をいやらしい顔に変え、リーダーはアキラの身体をなめ
まわすようにじっくりと見た。そして、アキラがうんざりしたよう
な顔でそれを遠回しに咎めると、丁寧な言葉づかいから一変粗野で
乱暴な言葉遣いに変わった。

「嫌な言い方ね？ 何のつもりかしら？」

「女はただ股開いとけって言ってんだよ！？ 殺されたいのか？
ああ！？」

「何ですって！？ あ、メル」

「アキラになんてこと言いやがる！？ 消えろ、屑が！！！」

ひ弱に思われた青年は、嫌みな青年の言葉に激高し彼に殴りかか
る。しかし、すぐに取り巻きの二人が前に出てメルの攻撃を防ごう
とした。だがそれは、失敗に終わる。なぜなら、前に出た二人ごと
青年三人は何か透明なものに圧倒的な圧力で吹き飛ばされ、あげく
に大木とそれに挟まれつぶされて絶命したからだ。

「……メルごめん」

「いいよ。それに、今やったのは僕が暴走しないように代わりにや
ってくれたんでしょう？ ありがとう」

「……どういたしまして」

アキラは、メル危険を感じとつさに自分の力で三人の青年を殺したのだ。そのため、いろいろ複雑な自分の感情を整理するためにメルに謝罪した。それに対し、戦うなど言っておきながら先に手を出そうとしたメルはもちろん怒るはずもなく、にこやかに許した。その上、自分の代わりに倒してくれたことに対してお礼までいう徹底ぶりである。アキラは、そこまでされて気まづくなったのか所在なさげにそっぽを向きながら返事をした。

「そ、それにしても、アキラを狙って来るエロガキどもが多くて困るね？」

「ほんと、こればかりは自分の出生を恨むわ」

お互い、少し気まづくなり話題は先ほどの失礼な青年達の話になった。二人の話しぶりからすると、先ほどの様な輩との衝突は初めてではないようだった。これらすべては、アキラの美しい容姿に起因することなのだ。

そもそもアキラのその美しい容姿は、両親から来るものである。母が淫魔であり父が人間、彼女はハーフ淫魔なのだ。その上、何の因果か母が得意にしていた淫魔固有魔法チャームが微弱ではあるが常に発せられてしまう特異体質で生まれてきてしまった。そのため、未熟な精神の青年たちが我を失いアキラを狙ってくるのがよくあるのだ。

「そうだね、僕でさえ時々危ういから」

「……暗い話は終わり！来たやつは、全員殺しちゃえばいいのよ」

「それが問題なんだけど……今回に限って言えば先に怒ってしまっ

たのは僕だからなあ」

ホントはいつもなら文句の一つでも言うメルであったが、今回は率先して自分が突っ掛かってしまったので強くアキラを批判できないのであった。

男子参加者ばかりを襲う男女のペア、その実態は理性を失い襲ってきた男子参加者を容赦なくぶち殺すこの二人によって生まれたものだ。本人たちから言わせれば、正当防衛なのだが時に真実ではなく事実が大事な時も世の中にはあるのだ。つまり、男子参加者ばかりを殺しまくっている。これは、まぎれもない事実であるので理由など関係ない。

二人は、大勢の参加者を殺したことにより巨狼の群れやワイバーンの群れといった刺客に多く襲われたが、アキラの特異能力やメルの特異な獣化能力の前ではそれほど脅威ではなかった。そのため、一日目であるにもかかわらず、粛清のための教師が二人彼らの討伐に乗り出した。しかし、その二人の教師たちも負けてしまった。なぜか？ 教師たちが理由をきちんとわかっており多少同情していたというのももちろんあるが、二人があまりに異質で戦いにくかったというのもある。二人は、異能力者と呼ばれる特殊な者たちなのだ。固有魔法でも属性魔法でも無属性魔法でもない特殊な能力を使うものたちがそう呼ばれ、そういうものたちはごくごくまれにしか存在しない。だから、実はこの二人は合格内定しているのでホントに勝ってしまうわけにもいかなかったという大人の事情もあったのだ。

こうして、二人は無事に一日目を終え二人背中合わせで用意してきた大型の寝袋に入ったのだ。

第十二話 美女と老人

ここは、ある建物の一室。人間の老人と龍人の美女が、何やら戯れている。老人の手は自然な動作で美女の尻を這いまわっており、美女も口では散々罵倒するが、身を捻ったりといった動作さえも見受けられないので、いうほどいやではないのかもしれない。いや、権力に物を言わせて黙らせているという可能性も無きにしも非ずだが、罵倒しているのもそれはないだろう。そもそも、龍人は外見で年齢などわからないからして、美女が実は結構な年齢であるかもしれない。……年を食っていたとしてもセクハラはセクハラであるが。

「ふむふむ、セクチュアル君最近一段と色気が増したね？ この綺麗でいて情欲をそそるお尻など、ほれつい触ってしまうほどじゃ」

「……理事長、死んでください。てか、殺します」

「ふむ、やはり尻こそが至高の部位じゃの」

「ですから、そのセクハラをやめろって言ってんだろこの変態が！」

「怒った顔も美しいのう」

「まったく、私を拾っていただいたことには感謝していますが、もうお歳ですのでやんちゃは控えてください」

美女の怒りも大して気にせず、老人はいつものようにその豊かな美女の胸にダイブした。美女はわめくことなく、どこか呆れたように、優しく老人を受け止める。その行為にはどこか母性を感じられ、

美女が老人を大切に思っているということがうかがわれる。

「なんの！　まだまだ、儂は現役じゃ！　それ、お胸にダイブ！」

「……何十年たっても変わりませんね」

「男はいつまでたっても男じゃよ」

「では、その状態でよいので聞いてください」

「ぱっふぱふう」

たいがい、老人の行為に嫌気がさして、華麗に流しているだけかもしれないが。とにかく美女は、本来の目的である入試の現在状況を老人に報告した。その際も、いちいち老人の返答に反応してやることはしなかった。きちんとした質問には答えていたが。

「……二日目にして、残存している参加者は全体の五割強程です。また、一部異常な力を持つ者がいます」

「今年の試験はハードじゃからのう。それも、毎年のことじゃろう？　」

「続いて、ブラックリストに載った者たちですが現在六名程を残してこちらの放った刺客に処理されました」

「……生き残っているものがあるのか？」

「ええ、この六名は処理をあきらめた方がいいかもしれません」

「それほどなのか？」

「教師でも勝てないものが多いでしょう」

「それは、面白そうじゃ」

「以上で報告を終わります」

「うむ、御苦労。もふもふ、気持ちええのう」

「……」

あくまで美女の胸に顔を埋めたまま報告を聞き終えた老人はその楽園を楽しむことを再開した。もはや美女は反応すら返さない。母性を感じて優しくすると言っても限度があるようだ。その状態が十分ほど続いたころ、ふと老人が顔を上げ美女に話しかけた。

「ところで、セクチュアル君最近校長を見かけないのだが？ どうしたのか知らないか？」

「あの方ならば、参加者にまぎれて入試に参加しています。あの容姿ならばれないでしょうし」

「ほう、仕事熱心じゃのう」

「……教頭がその言葉を聞いてたら発狂しますよ？」

「うむ、かわいい子は何をしてもよいのじゃ！」

「……………」

美女が老人に呆れかえって言葉をなくしていると、ちょうど午後十二時を知らせる鐘が鳴った。その鐘は、美女の勤務時間が過ぎたことを示している。なので、美女は断りを入れてその部屋を退場した。エロ老人を胸に張り付けたまま。

「……理事長？ いいかげん、手が出ますよ？ 私はこれから、自室にて睡眠をとるのですが？」

「一緒に寝よう！」

「いけません。そんなんだから、エリも逃げてしまったのです」

「ぐぼふぁ……」

美女は、禁句を言われ廊下に倒れこんでいる老人を意図的に無視して、浴場へと向かった。老人にさりと嘘を言うあたり、美女も相当イラついているのだろう。まあ、後ろの老人ストーカー対策でもあるだろうが。

「では、失礼します」

美女は、脱衣所に着くと服を脱ぎその完成された肉体を露出させた。大きめの乳房に、引き締まった腰からお尻にかけてのライン、そして美脚。もし、美女以外がこの場にいたのなら見られる人もいるだろう。しかしあいにく、夜も遅いのでこの時間ここには美女しかない。

「はぁはぁ、ゴクリ……最高じゃのう」

いや、変態老人がいた。流石付き合いが長いだけあって、美女の嘘を見ぬきここに先回りしていたのだろう。まあ、ここは混浴というかある個人屋敷の大浴場なのでいることは犯罪ではないのだが、美女にしてみればたまったものではない。全裸で油断しているところを、鼻息荒い老人に見られたのだ。さぞかし、ご立腹であろう。だが意外なことに、美女は微動だにせず溜息を吐くと老人に言った。

「まったく、またですか？」

「うむ」

「偉そうに言わないでください。仕方ないので、一緒に入浴してあげます」

「ホントか！？ いやあ、嬉しいのう！ 背中も流してくれい！」

「はいはい、しかしホント若いころから何にも変わりませんね」

「まあの！」

上機嫌な老人と苦笑する美女はいつものように一緒に入浴した。そう、いつものように。

第十三話 再会（前書き）

かなり短いです。すみません。

第十三話 再会

入試が始まって三日目の朝、ルイはセツナを抱き寄せるとレーナの居場所を探査しそこへ転移した。

転移した先には抱き合っているレーナと少女がいた。

「ル、ルイ!?」

「おう、レーナ……すまん、お楽しみ中だったか。二時間ほどしたら出直すから」

ルイはすぐさま状況を察し、気を使ってすぐにセツナと共に転移しようとした。

「ご、誤解よ! 私はルイ一筋なの! だいたい、この子は女の子よ!」

「シヨタではなくロリだったのか」

「違う! もう、この子は色々あって一緒に行動している子で、年齢も私と同じヨウコって女の子」

あわて過ぎるレーナに少し疑惑を感じたが、キスマークも見えないし、お互い服も着ていたのでルイは信じることにした。

「ほう……レーナこの爆乳は決闘の末俺の下僕になったセツナだ。セツナこいつは俺の幼馴染でレーナという。これから一緒に行動するから仲良くな」

レーナは、ルイの話を聞きセツナを見る。同年代では未だかつて目にしたことのない自分より大きな胸を持っている美少女がそこにはいた。もちろん、ウエストはくびれている。一方のセツナも、自分には劣るが抜群のスタイルをしているレーナをみてルイの話していたことは事実だったと確認する。ルイはセツナに言ったのだ。レーナというエロい体をした幼馴染がいると。

「あなたが噂のレーナ？ 私はセツナよろしく」

「噂のか知らないけど、そうだよ。よろしく」

二人は、同じ思い人を持ちながら対立する雰囲気は全くなかった。むしろ、自分に似た容姿に対し親近感を覚えていたようだ。そして、きっとこうも考えていたのであろう。この人ならば、自分を嫉妬のこもった目で見ないと。二人の美少女は、好印象での出会いを終えた。しかし、黒く染まった心で二人を見つめる幼女がいた。ヨウコだ。

「私のこと忘れてないかしら？ 私はヨウコよろしく」

ヨウコは、二人の美少女を見て無意識にとげのあるしゃべり方になってしまったようだ。なんせ、自分と比べ二人はあまりに恵まれている。おもに胸とか尻とか身長とかが。はっきり言ってレーナとセツナは一五歳にはとても見えないし、体つきを見ると十代ということさえ信じられない。ヨウコの外見年齢は……言わぬが花であろうが、少なくとも子供は産めそうにない。

「自己紹介は済んだな。ああ、ヨウコだったか。君、俺の今の魔法は秘術だから何も答えられないのでそこよろしく」

「……わかったわ」

ヨウコが、実はこっそりと気になっていたルイの魔法について聞く前にルイはそれを止めた。これに對しかなり不服であったヨウコだが、初対面ということもあり黙って引き下がったようだ。

さて、四人は今後の方針を話し合うことにした。まず、全員入試の課題である魔獣は各種倒していた。それに、生き残る実力も十分あり不安事項はあまりなかった。だが、一つだけ気になることはあった。それは、レーナが戦った超大型ガーゴイル？ である。あんなの集団に出くわしたらいくらなんでもまずいということで、四人はどこか隠れられる場所を探すことにした。一週間をやり過ぎために。

第十三話 再会（後書き）

誤字脱字の報告してくださった方ありがとうございます。ほかにも、感想くれた方ありがとうございます。感想くれる方がいると嬉しいです。

登場人物の紹介 読み飛ばし可能（前書き）

ネタバレあり

登場人物の紹介 読み飛ばし可能

主人公 ルイ

身長 176?

生年月日 3

月28日

神のシステムのバグにより異世界に転生してきた元青年、現在少年。龍人とエルフを両親に持ち賢者を師匠に持つ。さまざまな魔法の才に恵まれており、神によりもらった特権もいくつかある。十五歳になった今、たぐいまれなる美貌と強さをもち学院入試へと挑んでいる。

ヒロイン レーナ（封印器具つき）

身長 164?

B90

W56

H90

生年月日 3

月28日

ルイの幼馴染で同じ日同じ病院で生まれた。ルイには及ばないものの才能豊かであり、妖艶な美貌とすばらしいスタイルを持っている。同い年では、セツナに出会うまで才能・美貌の点で同性には比較対象になる者さえいなかった。現在はルイとともに学院入試に挑んでいる。

ヒロイン セツナ

身長 170?

B93

W59

H88

生年月日 4

月06日

学院入試中にルイがであった爆乳美少女。レーナに並ぶほどの才能と美貌、スタイルを持っている。ちまたでは「化け物」とよばれていたらしい。母親は牛系獣人とエルフのハーフで父親は鬼と人間のハーフである。現在は学院入試に挑んでおりルイにつき従っている。

ヒロイン プルリン＝ムンロー

身長 172? B100 W55 H90 生年月日11月29日

登場人物中現在最高のスタイルを持っている存在。不動産屋でアルバイトおよび学院側の人員として働いている。ダイナマイトボディの色気むんむんのお姉さま。純粋なサッキュバスではなく、エルフとサッキュバスのハーフである。実は19歳。しかも、新任教師だったりする。去年は一年間学院で教師としての勉強と研修を行っていた。

魔神の次女 メリッサ

身長 155? B89 W49 H91 生年月日05月05日

天真爛漫な性格で、スタイル抜群の露出狂。

魔神の長女 キュリア

身長 162? B82 W59 H80 生年月日12
月25日

聖女の様な外見の清廉潔白な美少女。

魔神 サタン

身長 645?

ザ・魔王的な風貌の魔神。教頭と並ぶ苦勞人。

吸血鬼の王 ワラキア

身長 184?

輕薄そうに見えるが、結構腹黒い美青年。

淫魔の女王 リリス

身長 170? B99 W55 H88

外見と醸し出す雰囲気は、エロの体現者。プライドが高く、かなり
の常識人。意外に苦勞人。

筆頭將軍 ジェクト

身長 210?

大柄でいかつい男。戦闘狂に近い。務めはきちんと果たす。

魔神の妻 ショウコ

身長 139? B69 W59 H70 生年月日 04月02日

ヨウコに並ぶロリっ子ボディ。霸王の貫録を持っている。

校長 ヨウコ

身長 138? B67 W60 H68 生年月日 05月05日

校長。現在レーナと共にいる。自分のスタイルにコンプレックスを持っている。

サブヒロイン? アキラ

身長 167? B87 W60 H84 生年月日 7月21日

スタイルの良い暴走美少女。人間と淫魔のハーフ。特殊な力をもつ。

サブヒーロー メル

身長 170? 生年月日 7

月07日

平凡な顔の平凡な少年。全種族の血をひいている。特殊な力を持つ。

賢者

身長 180? 生年月日 12

月23日

ルイと全く同じスペックを持った男性。不老不死でもある。正体は、神によるルイを補佐するための存在。現在は、ルイの妖精と獣と楽しく? 暮らしている。最近の悩みはエルフィの必要な攻めである。

ルイの妖精 エルフィ

身長 20? B12 W7 H11 生年月日 03

月28日

神がルイのために用意した存在。羽を持ち、女性らしい体つきに、美しい顔を持つ、基本的に世話焼き。

理事長

身長 173? 生年月日 1

月03日

エロ爺。昔はそれはすごかった……らしい。

理事長秘書

セクチュアル

身長 165?

B86

W54

H88

生年月日

1

月01日

龍人の美女。理事長の秘書を長い間している。

教頭 ジャンⅡFⅡフラミンゴ

身長 182?

生年月日

9

月27日

苦勞人。最近性格が崩壊しつつある

教師 マモル

身長 168?

生年月日

6

月08日

特になし

第十四話 最後の試練 (前書き)

合理性の全くない話です

第十四話 最後の試練

レーナ・セツナ・ルイは再会してから最終日の今日までなるべく目立たないように行動してきた。派手な戦い方をせず、地道にコッソコ敵を倒してきた。また、セツナを狙っての刺客もなぜか一度も来なかった。マモルの話を信じるなら、後数回は少なくとも襲ってくるはずだった。さて、最終日までには色々なことがあった。まずは、ヨウコが別行動をし始めたことだろう。彼女は、仲の良くなった三人に気を使ったのか居心地が悪くなったのか知らないが、四日目の夜突然いなくなっていた。ルイ達は、別段探すこともなくそのまま流したが、多少三人の間にぎこちなさは残った。それもすぐに氷解したが。さらに、六日目の朝突然仮想世界全体にアナウンスが流れた。

「現在の生存者は、六十名。合格予定人数になったので、ここからのサバイバルはクラス分けのために行う。また、予定していた二次試験は生存者が少ないため中止する」

これはつまり、参加者のレベルが低いため試験を終えるというものだった。これに対し、多くの参加者は合格した喜びと侮辱された屈辱を味わった。だが、今回の試験は例年に比べて格段に難易度が高かったためそんなに落ち込むことはない。それに、リタイヤしたものの多くはブラックリストの者を狩りに来た刺客に巻き込まれてやられたので、仕方がないこともある。それでもなお生き残っている参加者は、胸を張っていいのだ。

そして、最終日現在三人はセツナの刺客について話し合っていた。刺客が来ないなどという安易な期待はせず、対策を練ろうということになったのだ。もし、死んでも合格にはなるがそれもそれでいた

だけない。先日のアナウンスの内容が嘘というのも考えられるのだ。

「最悪の事態を考えて、私と離れて行動すればいい」

「悪くない案だ。しかし、これだけ一緒に行動していたんだ俺たちも狙われているかもしれない」

「うん、その為にも三人でいた方が安心だね」

セツナの自己犠牲的提案を即座に否定する二人。情が移っているということもあるが、もちろん打算からくるものもある。足手まといにお互いになっていないためこのメンバーは理想的なのだ。なので、もしもの時を考えると離れない方がよいとふたりは考えたのだ。また、ルイの欲望も判断の要因に入っていたかもしれない。

「二人がそういうのなら」

「で、恐らくだが今日中に刺客は襲ってくるだろう。だから、この際覚悟を決めて戦いやすい場所にうつらないか？」

「そうだね」

「わかった」

三人は、結局一緒に行動することにし大きな広場を目指して移動することになった。特に急ぐことなくゆっくりと歩いていた三人は、あることに気づく。それは、自分達の背後からものすごい轟音と悲鳴が聞こえてきていること。

「アキラ、どうするの！？ あれやばいって！！！！ 絶対無理！

」

「うっさい！ だから逃げているんでしょ！」

「どこに逃げるのさ！？」

「知らないわよ！」

三人がいる方向に悲鳴を上げながら爆走してきているのは、アキラとメルだった。三人は、その背後にありえないものを見た。超巨大ガーゴイルの群れが木々を押し倒しながら迫ってきていたのだ。しかもその背後には東洋龍が三匹。その様はまるで魔界が迫ってきているようであった。

そして、三人と二人は出会った。初会合は、啞然とする三人と魔物を引っ張る二人という形であったが。お互いにこの出会いを忘れることはないだろう。

「つて、そこの三人危ないから逃げてくれ！」

「ほっときなさいよ！ 他人なんて！」

「そうはいっても巻き込んだのは僕らじゃないか！」

「あゝもう、わかったわよ！ 私が一瞬あいつらひきつけるから、あの三人安全なとこまで逃がして」

「わかった。獣化！」

アキラは、覚悟を決めその場に立ち止まる。そして、魔獣の大群

に向かって特異能力を発動する。一方のメルは複雑な容姿をしたものに変身する。右翼がサッキュバス、左翼が龍の羽、顔が鬼、耳がエルフで、口には犬歯があり、身体は人間である。その姿になったメルは三人に近づくと全員を抱え込もうとして、ルイに撃退された。

「俺の女に何しやがる？」

「ち、違うんです。逃げてください！ あの魔物たちから！」

「ああ、逃げたいけど無理だ。後ろからも結構来てる」

ルイ達の背後には、やはり超巨大ガールゴイルの群れが。ルイは啞然とするメルを無視し、さっそうとガールゴイル達を相手取るアキラに近づき、隣に行くといつらに向かいドラゴンブレスを放った。そして何匹か倒すとアキラに話しかける。

「お前強いな。それにいい女だ。仲間にならねえか？」

「あゝん？ 殺されたいの？」

「いや、いやならいいんだ。時間とらせたな……レーナ！ セツナ！ ちよつとこっち来い！」

ルイの呼びかけで現れた二人の美少女を見てアキラは興味を示した。自分よりもスタイルがよく、レーナに至っては同じ種族のにおいがし、セツナにも自分に似た部分を感じたのだ。そして、四人は背後の魔獣たちを無視して話を始めた。

「ふゝん、あんたの仲間？」

「どうも、私レーナよろしくね」

「セツナ、よろしく」

「アキラよ、そっちで固まってるのがメル」

「俺はルイだ。その、メルってのは強いのか？」

ルイが、軽くメルに目を向けてその評価をアキラに聞く。すると、アキラは誇らしげにその大きな胸を張ってまるで自らのことを自慢するように、笑顔で言う。それはどこかとてもうれしそうだった。

「ええ、私が認める唯一の男よ」

「そうか……お前を今まで守ってきたのか？」

「っ！？」 ええ、メルだけが私を色眼鏡で見なかったし、一人の間人として見てくれた」

「ア、アキラどうすんの？ 完璧に囲まれたよ」

あわてて、アキラのもとにきたメルをみてルイは考えた。アキラとレーナはどこか境遇が似ている、そしてメルは自分とは違ってずっとアキラを守り続けてきたのだと。ならば、その根性は信じるに値するのではないかと。

「メルっていったか？」

「う、うん」

「俺はルイ。お前女を守る覚悟は？」

「ある」

先ほどまでのおどおどとした対応ではなく、はっきりと断言したメルを見てルイは決断した。自分とメルならば、やり遂げられる。二人で魔獣の相手ができると。ルイの行動は速かった。

「気に入った。ちょっと待ってろ」

「レーナ、セツナ、それとアキラだったか？　ちょっと俺に触れろ」

「「……ルイ」」

「だまってる」

「ちょっと、どういう？」

「メル十秒で帰ってくっからな」

「わかった」

ルイは三人を連れて高台に転移した。そして、驚くアキラを残してルイはメルの元へと再度戻った。メルは、一人大軍と戦っていた。その強さは見た目の割には普通で、そんなに驚くべきものではなかったが、ルイは十秒とはいえ一人でこの大群と戦ったメルに敬意を表した。

「メル、よくやった」

「うん、ルイこつからが踏ん張りどころだね」

「ああ、行くぞ！」

「おお！」

男が二人、規格外の大きさの魔獣の群れへと戦いを挑む。一見何の利もないやり方だし、メルを連れて転移すれば逃げ切れるのだが、かっこつきたい年頃なので仕方がないだろう。この年齢の男子は英雄に憧れるのだ。

第十五話 当たって砕けた

ルイとメルは、大いに奮闘した。ルイは半龍化して強力なドラゴンブレスを幾度も幾度も吐き、メルはさまざまな種族の固有魔法をうまく利用し、ルイをサポートした。魔獣の大群は、着々と減っていた。残りが半分ほどになった時、空中に彼ら二人が戦っていた魔獣だけではなく仮想世界全体の魔獣が集まり、そして交わった。黒い光を発して、完成したその姿は歪な世界全体を飲み込むほどの大きさをしたドラゴンだった。

その時の時刻は、試験終了予定時刻まであと一時間といったところ。そこから考えられるドラゴンの役割は仮想世界の破壊。黙っていれば自然に消滅して、試験終了となるはずだ。しかし、それを是といないものたちがいた。夢見がちな男の子たちだ。彼らは、バラバラにだがドラゴンに向かって攻撃した。しかしドラゴンには全く効かない。そんなとき、現れたのはメル。彼は、例の姿になってドラゴンに突っ込むとそのまま食べられてしまった。

彼は英雄にはなれなかったが、立派な最後であった。そんなバカなことを考えている男子達の前でドラゴンの一部が壊れた。そしてそこから飛び出してきたのはメル！彼は勇者になったのだ。それを見ていた参加者はあれよあれよとドラゴンに突っ込んで、殺されていた。メルも二回目突っ込んでいったときに殺された。空を飛べる参加者がいなくなったと思われたその時、彼はあらわれた。ルイである。ルイは、半龍化してドラゴンの正面に浮かぶと力をため始めた。ドラゴンもそれに呼応するようにエネルギーをためる。そして両者が放ったドラゴンブレスはぶつかり、仮想世界は真白に染め上げられた。

「皆さんお疲れさまでした。今現在こちらにおられる方々は真の合格者です。今年の合格者は、六十名です。身体の傷などは全快していると思われまますので、書類の方を受け取りに受付まで来てくださ
い」

啞然とする合格者たち。先ほどまで戦っていたドラゴンが仮想のもので、今いる場所こそが現実だと理屈では分かっているのだが、何とも壮絶な合格の仕方をしてしまった彼らは、すぐには動き出せなかったのだ。その例に漏れずボケつとしているルイに、後ろから抱きつくものが現れた。レーナである。そして、正面にはいつの間にかセツナが苦笑いをしながら立っていた。その横には、同じように苦笑しているメルとアキラがいた。

「ルイ、最後格好よかったよ？」

「ルイも男だな」

「ホント男って馬鹿みたい。メルといいあんたといい」

「まあ、男のロマンだな」

「そうだよね、アキラあれは男の子ならばやらないといけないことなんだ！」

「はいはい」

五人は、談笑しながら受付に書類を取りに行った。そこでは、多くの合格者が仮想世界での体験を興奮気味に語り合っていた。ある者は魔獣の脅威を、またある者はサバイバルの大変さを。今回の試験はただの試験というだけでなく、参加者全員に貴重な体験をさせ

ていた。

書類を受け取った後、合格者たちはホールに集められた。そして、そこで校長からの労いの言葉があったのだが、生徒達は驚いていた。なぜなら、校長が幼女だったから。加えて仮想世界であっていたものも何名かいたようで、その人々は一層驚愕していた。

「みなさん、はじめましてこの学院の校長を務めているヨウコです。見た目はこんななりですが、皆さんの十倍以上は生きています。それと、仮想世界で私を見かけた人もいるでしょうが安心してください……別に子供扱いされたことを根に持ってなんか、いませんよ？」さて、皆さんは四月からこの学院の生徒になるわけですがまず入学時に二つのことが選べます。学院内のアパートを借りるか、寮に入るかです。アパートは一律月五千円で、寮は朝食と晩飯つきでつき八千円です。光熱費はタダです。まあ、寮の方がお得ですし友達はできやすいですが門限があります。ですので、よく考えて決めてくださいね。最後に、皆さん合格おめでとうございます」

校長の話が終わると、合格者はその場で解散となり、皆一斉に散って行った。五人は、一緒に街へと向かい、飲食店に入った。そこで、五人は今後について話し合う。話はレーナが皆に聞くことで進められる。

「ルイは、寮に入る？」

「いや、どっかアパート借りる」

「セツナちゃんは？」

「私もアパートを借りるつもり」

「アキラちゃんとメル君は？」

「私たちは一軒家を借りて二人でルームシェアするつもり」

アキラのセリフに過剰に反応するレーナ。男女でルームシェアができることやルイと暮らせるかもしれないと知った為であろう。その過剰な反応に引くことなく、アキラは的確に情報を伝えた。

「えっ！？ そんなこと可能な！？」

「うん、渡された書類の中に書いてあった。両方の保護者と学院の教師の許可がいるらしいけど」

「それって、何人まで？」

「確か二人と三人があったはず」

レーナのすごいところは二人きりではなく、セツナも誘うところである。レーナはルイがセツナを気に入っているのを見越して三人で暮らすことを提案したのだ。本心から。

「ねえ、ルイ・セツナちゃん三人で暮らそうよ！」

「俺はいいけど？」

「私も賛成」

「じゃあ、私たちもルームシェアで決定！」

「じゃ、一緒に不動産屋さんに行きましょう」

アキラの号令で、五人は飲食店を後にし、学院専門の不動産屋へと向かった。

第十五話 当たって砕けた（後書き）

今回の話はどうだったでしょう？ ルームシェアはなんとなく憧れ
です

第十六話 不動産屋と美女教師（前書き）

スタイルのインフレが起こりそうです。そろそろ、落ち着いたスタイルの人も出さなければ……

第十六話 不動産屋と美女教師

不動産屋に着いた五人は、受付に座るダイナマイトボディの美女に話しかけた。その美女は、女物のスーツを着ており、生足に深いスリットのミニスカートが艶めかしかった。また、胸が大きすぎるのかボタンをしめきれず、ブラウスが大きく開いて黒いブラジャーまでもが少し見えている上半身も生唾ものであった。事実メルは息をのみ凝視しているし、ルイは口笛を吹いていた。

「す、すごい……」

「ヒュー」

メルはアキラに小突かれ、ルイはレーナに軽くたしなめられていた。前者は嫉妬で、後者はマナー故にである。それに対し、美女は妖艶な笑みを浮かべただ黙って見ている。まさに大人の対応だった。

「メル！ 馬鹿みたいにみとれない！ 鼻の下伸ばしてるんじゃないわよ！」

「ご、ごめん。あまりにもすごくて……あんなの始めてみた。あの人って純サツキュバスかな？」

「知らないわよ！ メルの馬鹿！」

「ルイ、少し下品だよ？」

「ん？ ああ、つい見とれちゃった。年上に興味ないはずなんだがな、ありゃ別格だ」

「タイプなの？」

レーナは、少し不安そうな顔をしてルイに訪ねた。自分より年上で、スタイルがよく、色気もある。そんな女性を目にして、今まで感じたことのない焦燥感を感じたのだ。しかし、その焦燥感もすぐに消えることとなる。なぜなら、ルイが遠回しにお姉さんとレーナが似ていると言ったからだ。

「お前が封印器具外して、もっと成長したらああなるんだろうな。……タイプだ」

「そっか……あれを、目指せばいいんだ。セツナちゃんがんばろうね！」

「うん。あれを超える」

五人の反応が一段落したのを見計らって美女が話しかけてきた。穏やかな母の様な表情で。

「私の容姿を褒めてくれるのは嬉しいのだけれど、そろそろ座ったらどうかしら？ 部屋を探しに来たのでしょうか？」

その言葉で我に返った五人は、美女に自分たちの要望を伝えた。

「それで、ルームシェアを探しているですけど」

「そうね。二人のルームシェアが二つと四人のルームシェアが三つあるわ」

「三人のルームシェアはないんですか？」

「残念がないわね。ごめんなさい」

しかし、二人のルームシェアはあっても三人のルームシェアは存在しなかった。

「どうする、ルイ？」

「まあ、メルとアキラはその二人用の場所を見に行ったらいい。俺らは一応四人のところ見に行こう」

ルイは、メルとアキラに二人用のルームシェアを見に行くことを勧めると、一応自分は四人用の部屋を見に行くことにした。いつまでも悩んでいては、メルとアキラに迷惑がかわかると思ったのだ。

「ところで、三人ってあなたとそこの胸の大きな……三人とも大きいわね」

美女は、身体的特徴で名前のわからない二人の少女を呼ぼうとしたが、胸が大きいという特徴は三人ともに共通する特徴であった。その為スムーズに会話を続けることができなかった。しかし、ルイがすかさずレーナとセツナの名前を伝え、どうにか会話が途切れることは防げた。

「はい、このレーナとセツナと俺で住むつもりです」

美女は、ルイに助けられたことをごまかすように自分も一緒に住むようなことを言った。ただ、理由はそれだけではなかった。美女は警戒していたのだ。実は今まで不動産屋でルームシェアを頼むも

のは多くいたが、その多くが同姓か恋人同士であった。しかし、男一人に女二人とあっては何か問題が起こるかもしれないので、けん制したのだ。それに、実はこの美女学院の教師である。どこの不動産屋にも学院の教師が常時おり、すぐに契約できるようにしているのだ。まあ、この美女のように不動産業務までしている者はあまりいないが。

「そう……私も一緒に住もうかしら？」

「ぜひ！」

ルイは美女の言葉を聞いて、喜んだ。それが恐らくは冗談であるとかわかっていても、美女・美少女三人と一緒に暮らすという妄想をしてつい興奮してしまったのだ。ちなみに、メルとアキラはすでに他のスタッフに連れられて部屋を見に行っている。

「あら、嬉しいわね。そちらの二人は？」

美女は優しげに微笑んで、二人の美少女に話を振った。ルイに心酔している二人が、自分の様なライバルになりうるものを一緒に住ませることに賛成するはずはないと踏んでのことだったのだが、二人が快諾したことで、断るチャンスを逸してしまった。

「ルイが一緒がいいなら」

「私も」

また、二人の態度を見て呆れてしまった。二人は全くルイに逆らうそぶりが見えないのだ。それはまるで、主人に仕えるメイドの様な態度であった。そして、つい皮肉のような言葉が出てしまったが

二人はそれに対してもまったく言っていないほど反応を示さなかった。

「ホントに従順ねえ……」

「サツキュバスの性です」

「……」

ルイは、ころ合いを見計らって美女に話しかけた。正直、冗談だということはわかっていたが形だけでも住んでくれれば部屋は借りられるので、尋ねたのだ。もちろん、美女に断るタイミングを与えたというところもある。

「で、お姉さんが一緒に住んでくれるならその四人でルームシェアしたいんだけど？」

「冗談のつもりだったんだけど、いいわ一緒に住みましょう」

美女は、なんだか後に引けなくなり、また自らも家を探していたのでそれを快諾した。加えて学生たちとの同居というものに興味をひかれて、面白そうだというのもある。建前は、生徒の監視であるが。

「ホントですか！？ おっしや、ハーレム！」

ルイは予想外の事態に尋常ならざる反応をした。まあ、こんな美女と同居できるのだから仕方のないことかもしれないが。また、レーナやセツナは例によってこの結果を好意的に受け止めていた。二人にとって、ルイの喜びは自分の喜びなのだ。

「ルイよかったね！ 私もお姉さんから色々学ぶよ！」

「たしかに、大きな胸を持つ者同士色々話も合いそう」

覚悟を決めた美女は、三人を引き連れて四人用の部屋へと向かった。それはどこか楽しそうな表情をしていた。

「わかったわ。じゃあ、そこの部屋を一応見に行きましょう」

第十七話 引越しと春休み

部屋を見て、気に入ったルイ達はその日の内に契約を済ませた。両親の元へ探査転移をおこなったため可能になった荒業だったが。また、ルイ達は美女が学院の教師であることを知り大層驚いていた。娼婦もびっくりのムチムチ魔乳美女が、実は聖職者だったのだから当然である。加えて、セツナが孤児院出身ということもここで明らかになった。現在は、養母のもとで二人暮らしをしていたらしいが。

「じゃあみんな、先生に着いてきてね」

「ふ、複雑な心境だ……」

「まさか、先生とは思わなかったね」

「意外……」

三人は、美女について美女の仮住まいに来ていた。そこは、ボロアパートの一室でなんと美女には不釣り合いな場所であった。しかし案内中はこぎれいで清潔感があった。ただし、風呂がついておらず美女はいつも銭湯に通っているようだ。それも新しい家に住むことで終わりになるが。

さて、なぜ三人が美女についてここに来たのかという引越しの手伝いである。基本的に家具は用意されていたので、荷物を運びに来たのだ。これから一緒に住むなかでもあるし、美女はルイとある取引をしたので三人は素直に着いてきたのだ。ある取引とは、男子中学生が考えそうなムフフなものであった。

ルイの活躍により、荷物の移動はすぐに終わったが問題は美女のいらなくなった家具だった。捨てるのにもお金がかかるし、どうしようかと悩んでいた。最終的には、リサイクルショップに売ったのだが売りに来た美女を見て店員は自らその場で家具一式を買い取っていた。それを終わると四人は服を買いに行った。レーナやセツナのサイズの下着は、普通の店ではあまり売っていないので美女排きつけの専門店へと向かったのだ。その後も、さまざまな店を回り買い物を終えたのはすっかり日が沈んだ頃だった。

夕食を外で済ませ、家に帰ると四人は同じベットで倒れこむように眠った。無論レーナとセツナはルイの腕枕で眠っており、美女はルイの上に乗っかって眠っていた。翌朝起きた時、ルイがうめき声をあげたのは仕方のないことだろう。

朝起きた美女・美少女は美女が行きつけていた銭湯へと出かけて行った。なんでも、一年間毎日通い詰めていたので、お別れのあいさつと今までのお礼を込めて番台のおじさんに巨乳美少女達の裸を見せてあげに行くそうだ。若い人があまり行かない老人たち御用達の銭湯らしく、自分以外にも潤いを与えてあげたいのだそうだ。美女は意外に義理堅かった。ルイはその言葉にムツとしたが、美女に明日からは一緒にお風呂に入って上げると言われて渋々承諾した。レーナもセツナも番台さんに見せることには抵抗がないのか、すんなりとルイの許可を取ってついていった。その間ルイは朝食の用意や部屋のかたづけを済ませていた。すっかり、主夫である。

さっぱりした様子で帰ってきた三人をルイは上半身裸の状態で迎えた。ルイはシャワーを浴びた後、ジーンズ一枚で過ごしていたのだ。それを見た美女を含めた三人は一斉にルイにとびかかり、すぐに我に返ると用意されていた朝食を黙って食べていた。ルイは、足をしっかり閉じて上半身には重ね着をして震えながら朝食を食べて

いた。

ルイが元気を取り戻した後、美女による街の案内が行われた。行ったばかりの銭湯や総合娯楽施設に図書館くわえてショッピングモールなど様々な施設を案内された。街を歩いている間、美女がルイの腕を組んで歩いていたので注目の的になっていた。美少女二人は案内してもらう手前、必死にその仕打ちを耐えていた。

美女による美少女二人に対する拷問を終え、家に帰るとルイは美女を誘ってすぐさま入浴した。美女も笑顔で約束を守った。風呂は普通の大人二人では狭いような風呂だったので、今回も美少女二人は耐えた。その反動か時間があると二人はルイにくっついていて寝るのはどうも皆一緒ということになった。

入学式までの間、四人は有意義な時間を過ごし、時々メルやアキラとも遊んだ。美女の仕事は、あの日だけの臨時のものであったように、美女もずっと一緒にいた。そのせいで、レーナとセツナはかなり過激な状態を常に維持していたが。

春休みの最終日ルイ達は美女によっていくつかの驚愕の事実を知らされた。それは、美女が未だ十代であり、学院の教師の八割は女性であることだった。なんでも、理事長の趣味だそうだ。

第十八話 優しい嘘

本日は入学式、過酷な試験に合格した者たちが一堂に会し、はじめて見る学園長の言葉に耳を傾けていた。学園長は、見た目が老人で教頭や校長に比べるとどこかオーラがなく、むしろ学園長秘書の方がオーラがあった。美女だったので。

「みなもの、よくわが学園に来た。三年間頑張るがよい。以上」

耳を傾けるほどの長さの話ではなかったが、学園長の話をみな素直に聞いた。その後、いろいろな行事をやって入学式を終えた生徒たちは事前に知らされていたクラスへと散った。一クラス二十人で、三クラスある。ルイ達は皆同じクラスであつたし、担任は同棲している魔乳美女であつた。

「みなさん、私が今日から担任を務めるプルリン・ムンローです。今年から、正式な教員となつたので教師としては皆さんと同じ一年生です。お互い不安なことも多いでしょうが、仲良くしましょう」

男子達は、目の前の魔乳美女が担任ということに歓喜し血の涙を流した。そして、ギラついた眼で担任の肢体を嘗め回すように見ると、今度は一点を凝視した。そこは、彼らがそろって生涯見たことのないほどの迫力だった。発情期の若い雄たちにとってそれは余りに魅力的で、自分を押さえることは難しかった。予想どおり、一人の男子生徒が自らの欲望を解放した。

「あの、先生って彼氏いるんですか？」

担任が火に油を注ぐようなことをいって、雄達の興奮は最高潮に

達する。鼻息を荒くし、眼は血走る。その姿は、生肉を目の前にした獣のようだった。

「いいえ、いません」

さらに、暴走を続ける男子生徒。その一人が周りの女子生徒たちの、ともすれば人を殺せるほどの鋭い視線を向けられてもなお……言った。今後の学校生活を捨てて……言った。禁断の質問を……言った。胸元が侘しい人や神経質な人にいうと地獄絵図が展開されるであろうそれを……言ったのだ。

「僕に、先生のブラのサイズを教えてください！」

そんな質問をされた担任は一切あわてることなく、それでいて妖艶に男子生徒に夢を持たせるような回答をした。その回答はもし審査員がいるのなら、高得点を与えただろうほどのナイスな回答だった。

「ブラは特注だから、サイズはわからないの。ごめんなさい」

鼻血を出す男子生徒が多数続出し、教室は混沌としてきたが、男子生徒はそれでも質問をやめない。なぜなら、担任がどんな質問にも答えており、今なら何でも聞き出せそうであったから。

「先生のタイプの男性は？」

担任は、その質問に対し即座に回答した。そして、決意を固める男子生徒たちを横目に話を切り上げ帰宅の指示を出した。もちろん、男子生徒は元気いっぱいの色よい返事をし、女子生徒の多くは自分の身体を見て一人自分を励ましていた。まだまだ、これからだ。

「強くて賢い子よ」

「……………（よし、がんばるぞ！）」

「では、みなさん気をつけて帰ってくださいね。さようなら」

「「さようなら！！！」」

こうして、波乱の入学式は過ぎて行った。男子生徒たちは知らない、担任とクラスメイトがすでに毎日混浴をする仲だとは。事実とは、時に残酷なものである。

放課後、一部の女子生徒たちは担任に自分を落ち着かせるためにある質問をした。その質問は、人によってはかなり機嫌の悪くなる質問だが、女子生徒たちはそんなことに構っていらなかった。女子生徒たちは、自分にあと何年猶予があるのか気になって仕方なかったのだ。十年あればいけるかもしれないと、その時はまだ期待していたのだ。

「あ、あの、失礼ですけど先生ってお幾つですか？」

「19歳よ？　どうして？」

希望は絶望へと変わり、その場で泡を吹き気絶する女子生徒が続出した。そして、恐る恐るしてはいけない、自分たちが壊れてしまいかもしれない質問を女子生徒は担任にした。

「せ、先生が十五歳のときって……その、胸ってどのくらいのサイズでした？」

「え？　そうね、覚醒の前はDくらいだったかしら」

それを聞いた、女子生徒たちは希望を見出した。そう、可能性はあったのだ。17歳の時に訪れる覚醒の時！　そのとき、身体は大きく変化するのだ。だから、その覚醒の時になっていきなり巨乳になることも可能。彼女たちはそう考えた。その言葉が、担任の優しさだとは気づかずに。

上機嫌で帰っていく女子生徒たちを見て、担任は優しく微笑んだ。その笑みは、まさしく保護者のそれであった。

「あの子たちには、夢を持ち続けてほしいわね」

高校入学時はすでに巨乳の域も超えかけていた、今は魔乳と呼ばれるほどに大きく、まったく垂れていない美しい自分の胸をいじりながら、担任はそうつぶやいた。

少年少女は皆踊る。希望に満ち溢れた、未来を信じ、ひたすら踊る。それが、担任の手のひらだとは知らずに。

第十九話 目指すものと目指されるもの (前書き)

いつもより短いです

第十九話 目指すものと目指されるもの

入学式の翌日、あるデモンストレーションが校長と教頭により行われた。

場所は学院の上空、その様子は特殊な魔法を使って大画面で上映された。

「さあ、皆さん！ ようく、ご覧ください！ これが、あなたたちの目指す先にある者達の戦いです」

放送部女子生徒の明るい声がスピーカー越しに全校生徒へと伝わる。

その声をしり目に、校長と教頭が上空へと浮かび上がっていく。

興奮した様子で、しかし黙って大画面を見つめる生徒たち。

上空で停止した校長と教頭、理事長が開始の合図を魔法で出す。

次の瞬間、大きな振動が学院全体を揺らした。

ひるむ学院の生徒たち。

しかしその振動はいつまでも続き、爆音までもが鳴り響く。

大画面に目を向けるとそこには、圧倒的な光と煙が存在していた。

ぶつかる魔法と魔法、肉体と肉体。

その衝突は、全校生徒の視線を奪ったまま小一時間ほど続いた。

そして、決着の時は意外な形で訪れた。

「ストップ！」

理事長の声が響いたかと思うと、校長、教頭、魔法そのすべてがとまっていた。

まるで、そこだけ時間が止まってしまったように

そこで、大画面の映像は途切れた。

すると当然生徒たちの行動は決まってくる。

生徒たちは全員校庭へと走り出し、空を見上げた。

だが、すでにそこには英雄たちの姿も戦った痕跡も残ってはいなかった。

何一つとして。

生徒たちが茫然と上空を眺めている頃、教頭と校長は二人揃って理事長室にいた。

そして、理事長……秘書の前で正座し延々と叱られていた。

理由は単純。

二人はやりすぎたのだ。

上級魔法までしか使用しないという当初の約束や接近戦はしないという約束をことごとく破り挙句の果てには学院どころか辺り一帯の地域すべてを消し去るほどの魔法を使用したのだ。

あそこで、学園長が止めに入らなかったらどうなっていたかもわからない。

少なくとも、学院の生徒たちは全滅していただろう。

だが、そこまでの力を使用してしまった二人にも言い分があった。

校長曰く、つい気分が高揚してしまった。

教頭曰く、つい日ごろの恨みが力となって湧き出てしまった。

これを聞いた学園長秘書が言った言葉はこれだ。

「あなた方はそんな理由で、多くの未来ある生徒たちを危険にさらしたのですか!？」

これを聞いた二人はその後、一切の口答えをしなかった。

一方その頃学園長は、ひたすら怒る秘書の尻を無言で撫で続けていた。

二人が解放された後、五時間にわたり理事長が秘書からされたことは理事長に新たな性の扉を開かせたとか。

さて、少し戻って英雄たちの決闘を見た生徒たちは自分達が生命

の危機にさらされていたとは知らずに興奮状態で先の決闘について語り合っていた。

その内容はどれも、校長と教頭を称賛し二人に憧れを抱くものだった。

そして、彼らは思うのだ。

あの二人のように立派になりたいと。

実際の彼らの惨状は別として、まさしく彼らは生徒たちにとっては英雄となっていた。

こうして、校長と教頭によるデモンストレーションは成功の内に幕を閉じたのだった。

第二十話 身体測定

入学式とデモンストレーションが過ぎたある日、男子にとってはあまり興味のない女子にとっては結構重大な行事が行われた。それは、男女分かれて行われまずは男子から行われた。チェックシートに様々な情報を書き込み、保健室へと向かう男子生徒たち。このチャンスにお友達を作ろうとお互いが頻繁に言葉を交わしている。そして、大した緊張感もなく身体測定を終えた。

「なあメル、魔力測定は行われなかったよな？　なんでだ？」

「僕も気になって、先生に聞いてみたんだけどなんでも先日のデモンストレーションの影響で測定器が壊れたらしいよ」

「ふうん、まあ確かにすごい戦いだっただもんな」

「流石のルイでもあんな戦いはできないでしょ？」

「悔しいが、確かに経験が足りないな」

男子達が、談笑しながら教室に入るとそこには独り言をぶつぶつ呟いている女子生徒がたくさんいた。そして、男子達に気づくとほぼ全員が悲壮な顔をして教室を出て行った。存外平気な顔をしているのは、スタイルに絶対的自信を持っているものや頓着していないものたちだった。

「な、なんかすごい顔していたな」

「うん……なんか、怖いね」

男子達は、女子生徒の顔をみて一様に恐怖を感じていた。だが、その恐怖を超えて興奮もしていた。なぜなら、この学校は女子の三サイズを測るといふ噂がある。男子は、腹囲と胸囲だけ計ったのだからきつと女子はヒップも測るだろう……と意味もない期待を寄せていたのだ。そして、生徒たちが知りたいのはある四人の三サイズ。クラスの三大巨乳美少女と魔乳教師だ。彼れらは、その四人のサイズを夢想しては鼻の下を伸ばし、女子生徒が帰ってくるのを待っていた。

一方の女子生徒たちは男子達が挙げた四人をみて、一様に溜息を吐いていた。バストとウエストは否応なく測られ、ヒップは希望者のみが測定されるのだが、やはりそこは幼くとも女性、自分の三サイズは知りたいので拒否する者はいない。だが、その結果優劣がきつちりと生まれる。いわゆる持つものと持たざる者だ。そして、完璧な格差社会がすでにそこにはあった。きつちりとしたスーツを着ているのにもかかわらず、問答無用でその硬い生地を盛り上げている担任教師。同じ制服を着ているが、ブラウスの盛り上がりが異常に大きい三人の同級生。まさに、巨乳四天王。しかし、ほかの女子生徒たちはわずかな期待を寄せていた。美しさなら、胸の美しさ具合ならば勝てるかもしれない。いや、勝っている可能性が高いと。あれだけ大きければ将来は絶望的であるし、下手したらすでに垂れているかもしれない。いや、そうに違いない。彼女らは、そうして自分を保っていた。実際にその二つの至宝を目にするまでは……。運命の時が訪れ大きさ、美しさ共に最高級のものを目にした一般女子生徒たちはその場に崩れ落ちた。更に追い打ちをかけるように、四人はウエストの細さもベスト8以内であった。

身体測定……それはスタイルの格差社会である。

帰ってきた女子生徒たちを見て、男子生徒たちは情報を知ることがあきらめた。なぜなら、一部の女子生徒以外が般若の様な顔をして顔を輝かせている男子生徒たちを睨んでいたからだ。クラスには、何とも重苦しい雰囲気が漂い男子達にとって非常に居心地の悪いものとなっていた。しかし、ここでこの状況を打開し男子と女子すべてに希望を与える言葉を発したものがいた。何を隠そう魔乳教師である。

「はい、皆さん身体測定終わりましたね！　なぜか私も理事長命令で受けさせられましたが、男子達気になっているんじゃないですか？　女子の三サイズ？」

その声に男女問わずクラス全員の生徒がはっと顔を上げた。両者ともいきなりの展開についていけず、驚いているようだ。そして、続く言葉を耳を澄まして待った。

「ふふ、私を含めたここにいる女性の中で五番目のバストを持つ女子生徒の三サイズを教えましょう。もちろん本人に許可も取っております。では、発表します。五番目のバストサイズを持つ娘の三サイズは……86・61・89です。男子はこれで我慢、女子はまずは彼女を目指しましょうね！　はい、先生の話はこれで終わりです」

この話を聞いた男子達は盛り上がって、誰が五番目かと話し合いう。女子たちは誰が五番目かわからず悩んだ後、自分が五番目になるんだと決意を固めていた。この反応はすべて、魔乳教師の仕組んだものだったがひとまずは大団円であった。

余談であるが、実はこのクラスには隠れ巨乳がおり5番目の子は実は六番目であった。またその子は、レーナをも超えセツナに迫る勢いであったが普段サラシで抑えている上、着痩せする為誰もその

事実気づいてはいなかった。唯二人、事実を知るのは魔乳教師と当人だけであった。

その頃、理事長室では理事長が全女子生徒の身体測定の結果を眺めながら鼻血を出していた。

「プ、プルリン先生のクラスはすごいもの。まるで楽園じゃ……よくもこれだけ、豊かなものが集まったものじゃ。しかし、やはりプルリン先生は別格じゃな。しかも、学生時代からさらに成長して……」

それを、呆れてみる理事長秘書は溜息を吐きながら理事長に質問した。

「なぜ、女性教師や女性事務員まで身体測定を受けなければいけないのですか？ それに、三サイズを測る意味があるのですか？」

理事長は、クワツと目を見開きものすごい形相で主張した。

「趣味じゃ……！！」

キツイボディブローを秘書からもらった理事長は、血を吐きながら復活し何とか言葉を紡いだ。

「ごふお………というのは八割の理由で、国の研究機関から若者たちの詳細な身体データの提供を頼まれているのじゃよ。あそこには、一応いろいろと無理を聞いてもらっているしわしの趣味も満たされるし引き受けたのじゃ」

「プルリン先生が赴任したからというのが理由ではなかったのです

ね……失礼しました」

「なに、それもあるが……す、少しくらいいい思いしてもよからうが！　う、うわああああん」

理事長秘書は、泣きながら逃亡する老人を微妙な顔で見送った。

第二十話 身体測定（後書き）

秘書が最近、手が出るようになってきてます。彼女は、人のために怒れる人なのです。

第二十一話 履修登録（前書き）

今回は、セリフ一切ないで少し堅苦しい内容です。ただ、短いので安心？ してください。

第二十一話 履修登録

様々な勉強以外の行事を終えた新入生は、教師によりあるプリントを渡されていた。そのプリントは、各々が選択できる授業の一覧であった。

学問系からサバイバル系まで様々なものがあり、最低限履修しなければいけないものと履修を選択できる物の二つがあった。

選択できる物の中で最も人気があったのが、決闘学と戦争学である。これらは、サバイバル系の選択科目であり前者は決闘の仕方と模擬決闘を後者は戦術と用兵そして小規模での模擬戦争を授業で行っている。どちらの科目も選ぶ生徒が多く担当教員は三人づつ付いている。また、決闘学は教頭と校長が戦争学は理事長と理事長秘書が担当することでも人気を得ている。正直、両方とも残りの一人の教員はおまけである。

さて、ルイ達の担任であるプルリン先生が何を教えるかということ彼女は必修科目を教えていた。魔法学と魔獣生物学である。魔法学とはあらゆる種類の魔法を教育指導する科目で、魔獣生物学とは各種魔獣の生態と弱点また生息地域などを教える科目である。ただ、これらは学問系が主となるのであまり人気がない。しかし、担任が魔乳教師になるとあって男子生徒たちのモチベーションは上々だ。

次に、女子生徒専門科目を紹介しよう。これは、女子生徒全員と一部の男性生徒が受ける学問で名を美貌研究学という。この学問では、いかに自分を美しく見せるかを研究する。魔法叱り、お肌の手入れ叱り、ファッション叱りもちろん内面の美しさも磨くのだ。この学問のおかげか、学院の生徒は美女ぞろいで有名である。担当教

員は、理事長とオカー・マゲイル先生だ。オカー・マゲイル先生は性別を超越し、おねえ言葉を操るスキンヘッドの中性である。

女子専門科目があるならば男子専門科目もある。その名も、男の美学である。担任はイケ面とボディビルダーの二人。いかにかっこよく、そして男らしくあるかを教える学問だ。イケ面は男らしさを、ボディビルダーはかっこよさを教える。この科目、なぜか女子生徒にも人気があり美貌研究学とは違う時間に行われている。この学問成績上位者の多くが女性なのが長年の悩みだとか。

履修登録は、十日間の猶予が設けられその間に決定し提出する仕組みになっている。この履修登録をしなければ、適当に人気のない科目を選択され悲惨な未来が待っている。その為、ほとんどの学生は締め切りの三日前には履修登録を終わらせる。

ルイ達はすでに履修登録を済ませていた。男の美学と美貌研究学以外のすべての教科を五人は同じにしていた。あまり褒められた行為ではないが、いずれも人気のある教科を選んでおり、五人とすべて同じ選択科目という生徒は実はかなり多くいた。

余談だが、この学院には十を超える親衛隊が存在する。その親衛隊たちは、対象となる人物と同じ選択科目を選ぶことが多いのは言うまでもないだろう。ルイ達五人にはすべて親衛隊がきている：わけではなく、メル以外の全員に親衛隊がきている。また、メルには親衛隊ではなく応援隊というものがあるのだがこれは今は割愛する。

履修登録の最終日、全生徒の履修登録はつつがなく完了した。

第二十二話 プルリン先生の魔法授業

プルリン先生の授業が始まった。まず先生は、全員にく魔法のしくみ>という本を購入させ読んでくるように伝えた。そして、最初の授業で初級魔法を使用して見せた。炎・氷の二属性だけであったが。

さて、実は生徒達は初級魔法など使えるし、魔法のなんたるかも心得ている。要するに、この第一回の授業はガイダンスなのだ。プルリン先生は、一通り魔法概念を話すと生徒達に校庭に出るよう伝えた。校庭に出た生徒たちに、プルリン先生は自ら高難易度の魔法を披露した。その魔法はとても繊細でかつ美しかった。さすがに、校長や教頭のようにはいかなかったが、生徒たちは一様に感心していた。

「先生の……すごいな」

「……胸の話か？」

「魔法の話だよ！」

「確かに、すごいな。美しさといい規模といい最高だ」

「何の話だ？」

「魔法だよ……」

また、教頭と校長の教える教科もすごかった。何がすごいかというと生徒に対するスパルタっぷりと放置っぷりである。教頭はス

タジアムを貸し切り、自分対生徒全員の魔法バトルを行った。もちろん加減はしていたが、怪我人しかでなかった。病院送りが半数、保健室行きが半数……軽傷ゼロ。一方の校長は生徒全員を自分で作った簡易サバイバル空間に放り込んだ。入試で使われたものとは違うもので、絶えず魔法が四方から照射され肉体的に危険になれば病院に転送されるというものだ。こちらは、最後まで残っていたのは、全体の1割以下で残りは瀕死である。

「教頭、校長何か言うことがあるのではありませんか？」

「後悔はしていません……すみませんでした！！　ほんとに済みません！　だから、その解雇通告書をどうか下げてください！」

「ほんとに、いいかげんにしてくださいよ？　今回は解雇猶予ということにしておきますが、次はないですからね。教育にやりすぎはないといいますが、殺してしまっただけは元も子もないですよ？　プルリン先生を見習ってください、まったく……校長といい教頭といいどうしてこう問題児ばかりなのか、理事長は理事長で年から年中私へのセクハラをしてくるし……とにかく、今後は自覚を持って気をつけて行動するように！」

「はい！！！」

その日の夜、狭い風呂でルイとプルリン先生は学校の成り立ちについて話していた。なぜそんな話になったのかは定かではないが、おおよそ個性的な教師たちを見て興味をひかれたのであろう。プルリン先生はすべてを知っているわけではないといった上で説明を始めた。

「学院は今から三百年程前に作られたと言われているわ。当時最強

を誇っていた魔法使いがほんの気まぐれで小さな魔法教室を始めたの。最初は、適当にやってすぐやめるつもりだったらしいのだけれど教える楽しさを知ってしまったのね。なかなかやめられなかった。加えて、その人の知名度もあってどんどん生徒になりたいって人がやってきたものだから、またたく間に規模も大きくなって有名になっちゃった。やめるにやめられなくなったのね。それから、具体的な方針やら制度が整えられていって今の形になったの」

「ふうん、その最強の魔法使いって」

「理事長だと言われているわ。確かなことは何も分かっていないし、本人はもしかべらないから真実は謎のまま」

「へえ、理事長にそんな過去があったとはねえ。人はみかけによらないなあ」

「ルイ君は、理事長ちゃんと見たことあるの？」

「……言われてみればないかも、てきとうに流してた。でも、平凡な感じだったはずだぜ？」

「ふふ、そうね。私の印象も、ちょっとエッチなおじいさん……かな？」

「え、セクハラとかされてるの！？」

「ううん、されてるのは秘書の人。四六時中されているから、教師の間では有名よ」

「な、あの美人な人にそんなうらやましいことを！ 即刻首だ！」

「ふふ、でもあの二人はすごく長い付き合いらしくて、秘書の人もなんだかんだで受け入れているらしいわよ」

「それでも許せ〜ん！ いや、むしろそのほうが許せ〜ん！」

「お仕置きはされているらしいけどね？ 時々、学院内に謎の奇声が響き渡るでしょ？」

「まさか、あれって人の声なのか？ なんか精霊的な者の仕業と思っていたんだが」

「あれは、秘書さんにお仕置きされている理事長の悲鳴よ」

「……おれ秘書さんよりプルリン先生の方がいいや！」

「あらあら、嬉しいこと言ってくれるわね。今日はいつも以上に甘えさせてあげる」

その夜ルイは、浴槽でプルリン先生に大層甘えた。胸に顔を埋めて、なかなか離さなかった。ルイはお風呂から上がった後、久しぶりに同居人の三人全員と一緒に眠り、三人の胸にかわるがわる顔を埋めては甘えた。あまり普段は見られない甘え具合だった。

なぜルイがそのような行動に出たのかは謎である。だが、甘えて至福の時間を過ごしているはずのルイはずっと小刻みに震えていた。もしかしたら、彼は将来自分が理事長と同じようになる可能性を考えて震えていたのかもしれない。

第二十三話 ハーフ淫魔の会合

きちんと整理され、多くのぬいぐるみと大人のおもちゃ、ルイの写真が埋蔵されているこの部屋は吸血鬼と淫魔のハーフであるレーナの自室。そこには、今三人の女性が存在していた。一人は部屋の主であるレーナ、もう一人は入試以来レーナが仲良くしている人間と淫魔のハーフであるアキラ、最後の一人はエルフと淫魔のハーフであるプルリン先生である。彼女らがなぜ集まったのか、それは単純な話。ハーフ淫魔としての苦労話をする為。ぶっちゃけて言えば、愚痴り合う為である。

初めに、会話を始めたのはやはり部屋の主であるレーナだった。ルイを模したであろうぬいぐるみを胸に抱きながら、どこか羨ましそうに口をすばめてアキラに問いかけた。

「アキラは、私と違ってずっとメル君が異性の視線とかから守ってくれていたんでしょう？」

「まあね。メルにはすごく感謝してるわ」

「それでも、大変でしょ？ 私たちはただでさえ異性を引き付けるのに、それに加えてチャームまで無意識に発してしまうのだから」

「入試の時にも異常に男性から迫られたわ。メルがいるからそうでもないけど、基本的に男は大嫌いよ」

「私は、ルイ一筋だから。他の男の人に興味はないけど、大嫌いというほどでもないかな」

「レーナちゃんは幸せね、ルイ君がいて」

「今は、そうですね……ルイが賢者の弟子だって知ってますよね？
ルイは長い間その賢者さんのもとにいたから、私はルイと幼馴染といっても15年の内半分ほどしか一緒にいたわけではないんです」

「でも、だからこそルイ君に猛烈アタックできるんじゃない？」

「それは確かにあるかも……」

「アキラちゃんは、メル君に思いを伝えられないのね？」

「うっ……それなりに仲良くはしているつもりだけど、やっぱりどこか気恥かしさがあるのよ」

「先生は異性の幼馴染とかはいないからわからないな……」

「先生は、どこ出身なんですか？」

「私は、両親が五歳の時に死んでしまっただけでそれからはずっと女性修道院で暮らしていたの」

「あ、まずいこと聞いちゃいました？」

「ううん、もう私も大人だから平気よ。生活のすべてが女性社会の中だったから、15歳までは異性を見たことすらなかった」

「へー、それは幸せなことじゃないですか？ 私なんか吸精衝動が抑えられなくて、しょっちゅうメルに襲いかかってましたよ」

？」

「私は、ルイと再会するまで一生懸命我慢し続けたかな」

「嘘!？　すごい！　でも気持ちわかるわ……私も、どんなに乾いてもメル以外からもらいたくないもん」

「先生の場合は、そうね実はルイ君にさせてもらうまで一度も吸精したことが無かったわ。衝動すらなかった」

「え、じゃあ先生もルイ以外の男性から吸ったことないんですか!？」

「ええ、そうよ」

「へえ、じゃあ私たち三人ってすごい組み合わせね。淫魔の血が流れているのに、浮気症が一切ないどころか一途だなんて……レーナと先生はルイと波長が合っているの？　私は、メルと85%合ってるわ」

「私は、ルイと100%あってるよ」

「「え!？」」

「うん、ありえないなんて言われているけどありえるんだよ」

「そ、それってすごくない!?　初めて聞いた!」

「先生も初めて聞いたわ。因みに、先生はルイ君と83%合っているわ」

「自分でもすごいと思う。だから、私ルイ以外の男の人に魅力を感じるところか興味もまったく湧いたことないの」

「は」

「ご、ごめんなさい。惚気るつもりじゃなかったんだけど」

「ねえ、前から不思議に思っていたんだけどさ。レーナってルイの巨乳好きっていうか、浮気症についてどう思っているの？」

「先生には耳の痛い話だけれど、聞いてみたいわ」

「うーん、独占したいって気持ちは確かにあるんだけど。それより、捨てられたくないとか一番でいたいとか、喜ばせたいとかいう気持ちが強いかな？ ルイは、浮気はするけど隠したりしないから。それに、淫魔の私が独占がどうの言うのもどうかと思うし」

「私は嫌だけどな、メルがほかの女性に目移りするのを見るのは」

「先生は、好きな人がかまってくれるなら何番でもいいかな……淫魔の女って男にとって都合のいい性格をしている者が多いのかしら？」

「実際の淫魔は浮気もするしされても怒りませんからね。一応私も先生も半分だけ淫魔ってことなんじゃありませんか？ 浮気を許すって点だけ」

「ルイ君は、こんないい女を何人も侍らせて責められないのだから幸せ者ね」

「ほんと、もしメルがそれをやったら私は許せないと思うな。二人はすごいよ、器が広い」

「自分で言うのもなんだけど、確かにそのとおりね。先生もレーナちゃんも器が広すぎるわね」

「そうかもしれませんね。それで全然かまいませんけど。でもほんと、ルイも言っていましたけど、私と先生って似てませんか？ 色々なところが」

「そうね、おもに性格とか男性のタイプとかが」

「二人とも苦勞しそうだわ」

「う、否定できないかも」

「先生も同じね」

この後も、ハーフ淫魔たちの姦しい雑談会は七時間ほど続き、セツナが部屋に入ってきたことで今度はガールズトークが三時間ほど行われた。そして、離し終えた四人は近所の引っ越すまでプルリン先生が行きつけていた銭湯へ行き、番台を感激させたらしい。

第二十三話 ハーフ淫魔の会合（後書き）

状況描写がうまくいかず、余計な地の文を削除するだけにとどめることにしました。ぐちゃぐちゃになると元も子もないので。では、失礼します。

第二十四話 賢者と妖精と獣（前書き）

短いです。

第二十四話 賢者と妖精と獣

とある秘境に賢者が住んでいる。彼は、二十年ほど前までは一人で静かに暮らしていた。しかし、自分本来の役目を為す時が訪れ、それをしばらくの間こなしていた。そして、その役目は半年ほど前一応終えたのだが、何の因果か厄介なものを預かることになった。妖精と獣である。この二個体は、彼の弟子である少年の身内なのだが、何かと理由をつけて賢者に押しつけて行ったのだ。

「ふむ、エルフィ君はルイの元へ行かないのかね？」

賢者は、自分の眼の前で紅茶を飲んでいる妖精に話しかけた。彼女は、身長二十センチ程で非常に女性らしい体つきをしている。金色の髪を緑のリボンで結びポニーテールにしており、服は腰に一枚パレオの様なものを巻いているだけで、他には何も身につけていない。顔つきは非常に整っており、かわいいというより美人といった系統だ。瞳の色は、透き通るような青である。

「賢者様、そんなに私がうつとうしいですか？」

その美しい顔を少し歪ませて、エルフィは賢者を睨みつけた。美人が起こると怖いと言われているが、それは妖精にも当てはまるようだ。

「いや、そういうわけではないのだが（レオ助けてくれないか？）

」

少しまずいことを言ってしまった賢者は、すぐさまテレパスで弟子の獣に助けを求めた。実は、このパターン定式化されていたりす

る。そして、獣の反応も決まっていた。

「（今のは賢者が悪い。それに、飛び火を受けたくない。だから嫌だ）」

エルフィは、心ここにあらずと言った状態の賢者に目ざとく気づき、追及を強めた。その身体を浮かせ賢者の眼の前に飛んでいくエルフィ。

「賢者様、聞いていらっしやいますか？」

賢者は、たじろぎながら少し後ろに下がる。だが、そんな簡単に逃がしてくれるエルフィではなかった。エルフィは、何かを唱えるとその姿を全長二十センチから五十センチへと変化させた。ただし、羽は消えてしまい妖精ではなくただのちっちゃなエルフとなっていた。エルフの割には豊かな胸を持っているが。相対的に。その変身によって、エルフィの迫力は増した。エルフィは、羽が無いその姿でも飛べるため重量の増したその姿で賢者を押し倒した。のけぞり、じわじわと後ろへ逃げている賢者を押し倒すことはいかに大きな体格差があるといえど簡単なことだった。

「ぬっ！？ エルフィ、何をするんじゃ！？」

当然賢者は驚き、抗議の声をあげるが、エルフィは賢者の首にまたがり、両手を腰に当てて、大きな胸を大きく張り、賢者を見下しと言った。

「この体制ならば逃げ出すことも、目を反らすこともできないはずですから。今から、お説教をおこないます」

ばつちりと宣言されてしまった賢者は、うろたえた。彼自身、いつも弟子にお説教をしていた立場であるし、長い間説教というものをされた記憶が無い。しかも、日ごろ口うるさいエルフィによる説教など想像に難くない。だから、不安になってうろたえたのだ。賢者、生れて初めての感覚であった。

「わ、儂は説教などされる覚えはないぞ!？」

だが、賢者のうろたえようを見てもエルフィの態度は変わらない。むしろ、その首をまたいでいる足をきつく首に絡ませ、両手で賢者の両耳をつかみ、賢者の眼を真上から覗きこむような体制になった。大きな胸が賢者の鼻を挟む形となっていた。

「何をぬけぬけと、日ごろあれだけいろいろとお世話をしてあげている私に対しての数々の心ない言葉、今まではマスターの手前我慢していましたが、ええ、今日こそは言わせていただきます」

聞き捨てならないエルフィの言葉を聞き抗議の声を強める賢者。大きく眼を見開き、顔を身体で覆われているためくぐもってしまう声に気を回すことなく、言った。

「な、普段のあれが遠慮しているだ?!? そんなはず……」

しかし、そのセリフはギリリと光ったエルフィの眼光と怖い声によって遮られ、同時に賢者の心は粉々に打ち砕かれてしまった。賢者に生れてはじめての敗北を与えたのは身長五十センチの妖精であった。

「何ですか？」

「いえ、なんでもないです」

もう、勝敗は決していた。後は、狩る者と狩られるものがその役目を全うするだけ。エルフィの賢者に対する必要な攻めは、日が暮れ再び日が昇るまで続けられた。賢者はしばらくの間、夜な夜な実寸大のエルフィに責められる夢を見ては、うなされていたらしい。

「だいたいですねえ、賢者様は……」

一匹騒動の外にいるレオは、二人のにぎやかな様子を見ながら、ここにはいない自分の主人に向かって心の中で呟いた。しゃべることができないので。

「（拝啓マスター、お元気ですか？ 今日もここ賢者の森は平和な日々を送っています）」

こうして、賢者と妖精と獣の平和な日常は過ぎていく。

第二十五話 魔神の憂鬱（前書き）

少し変な終わり方をしているかもしれませんが。ご容赦を

第二十五話 魔神の憂鬱

ここは、夜をつかさどる種族が住んでいるとある場所。そらは雲で覆われ、辺り一帯が世界最大の山イカロスに囲まれているため、日が差すのは一日三時間ほど。その為、あまり農業は盛んではない。しかし、鉱物はさまざまなものがとれる。ダイヤ、金、銀、銅などはその主な例だ。その為、貿易により莫大な富を得ている。渡すものは金銀財宝、得るものは食料と血液と精液。そう、ここは淫魔と吸血鬼の住む王国ナイトメア。

この国を治める者はこう呼ばれる。魔神サタン。なぜ魔王でないのか、それはわからない。しかし、魔王と呼ばれるものは、その国には魔神以外に四人いる。淫魔の女王リリス、吸血鬼の王ワラキア、魔神の次女メリッサ、筆頭將軍ジェクトの四人だ。淫魔と吸血鬼の国と言ったが王族はその範疇に含まれない。王族は、魔族という特殊な種族であり、その力は他の種族を大きく凌ぐ。龍人さえも。そして、筆頭將軍だが彼もまた吸血鬼でも淫魔でもない。淫魔と吸血鬼のパワーバランスを考えて、筆頭將軍には代々他の種族のものを招き入れているのだ。今代の筆頭將軍は、龍人とエルフのハーフである。

その魔神と四人の魔王と魔王の長女がある会議をしていた。実質この国の政治を動かしている六人が一同に会するということはそれなりの案件について話し合いがなされるということだ。今回議題にあがっているのは、魔神の次女メリッサの問題行動についてだ。魔王の一人でありながら度重なる不祥事を起こし続けており、しかし国民特に男性からの圧倒的な支持があるため表舞台から離すこともはばかれるということだったのでどういった処罰に処すか話し合うことになったのだ。

「全くうちの娘はどうかならんのか!? 上の子は、立派になったというのに、毎日毎日男湯に裸で乱入したり、会議で急に脱ぎだしたり、私の王座で自慰行為を始めたり、ヌードデッサンがしたいと言って貴族の男どもを集めてヌードになったり……まったく何だあいつは!?! 露出狂か!?! 性欲の塊である淫魔でさえ淑女に見えるぞ……」

魔神サタンは、誰に向かってというわけでもなくただ頭を抱えて叫んだ。目には涙まで浮かべている。とても一国の王には見えない。そして、傍らには胃薬が置いてあり、彼の苦労が今に始まったわけではないことを指している。

「サタン様、確かに淫魔は性欲がかなり多いですわ。ですがそれは、性行為というものが私たち淫魔にとって食事と同意であるからですわ! メリッサ様と一緒にしないでくださいませ!」

サタンの愚痴に異を申し立てたのは、例として出された淫魔の女王リリスである。彼女の身体は、はち切れんばかりの大きな乳房と折れそうなほど細いお腹回り、つき出した大きなお尻そのすべてが極めて淫美で官能的に表現されている。加えて、ぼってりとした唇に、切れ長の目がその美しい顔を妖艶に見せている。魔性の美女とはまさに彼女のことであった。

「リリス、少し言葉が過ぎるのではないかい? メリッサ様はサタン様の次女なのだよ?」

リリスのサタンに対するものいいは、ともすれば不敬に当たるほどの強い口調であった。その為、それをいさめる者も当然いる。魔王であるリリスを諫められるものはそう多くない。今回それを行っ

たのは同じ魔王で吸血鬼の王であるワラキアである。彼は、金色の髪をオールバックにし鋭い目つきとは裏腹の穏やかな笑顔を浮かべる何ともちぐはぐな男であった。長身で細身の美青年、そんな印象の男性である。

「まあ、そう言いなさんなってワラキア。淫魔の女王としてリリスにも譲れないところがあるんだろ」

ここで、リリスとワラキアが言い争ってはまずいと場を治める者が登場した。魔王で筆頭將軍であるジェクトだ。彼は、整った顔をしているがその頬についた十字傷やぼさぼさな髪の毛、大柄な体躯に浅黒い肌が相まってとても粗暴な印象を人に与えていた。

「見せることはいいことなのだ！ 皆私の裸を見て喜んでいるのだ！ 私も見せると興奮するのだ！ とても気持ちいいのだ！ 嬉しいのだ！ 楽しいのだ！ だれも不幸にならないのだ！」

そして、自分の問題行動の正当性を何とも子供っぽいしゃべり方で述べるのは、魔神サタンの次女で魔王の一人メリッサである。彼女は、長いツインテールの髪型に大きくクリつとした目、長く美しい手足に、プリツとしたかわいいお尻とくびれた腰にプルンツとはじけそうな瑞々しく大きな乳房を持つ、なんとも健康的な身体のいわゆるかわいい系アイドルと言った風貌であった。

「はぁ……キュリアお前も姉として何か言ってくれ。私はもう、ストレスで胃に穴が開きそうだ」

その外見はかわいいが、内面は困ったチャンの愛娘をみて、溜息を吐いたのはこの国の支配者魔神サタンである。彼は、人とは一線を画した巨大な体躯をし、その肉体は鋼のように鍛え抜かれ、子供

が見れば泣き叫ぶどころかショック死するほどのいかつい風貌をしている。頭には王冠をかぶりまさに支配者といった感じである。もし、下を向きながら頭を抱えて泣いていなければの話だが。

「お父様……メリッサ、あなたの行動でお父様は悲しんでおられるのよ？ あなたは誰も不幸にならないと言ったけれど、お父様や私は不幸になっているわ」

父の嘆き様を見て優しく心配するのは、この国の宰相であり魔神の長女であるキュリアである。彼女は聖母の様な美しく慈愛に満ちた顔をしており、そのスタイルも妹のように巨乳ではないが決して貧乳でもない、何とも目に優しいものであり、誰もが想像する清純派アイドルまたは教会のシスターと言った風貌であった。

「ふんっなのだ！ お姉さまは、大した体つきをしていないから私をひがんでいるだけなのだ！ 臣下がいつも言っているのだ！ お姉さまは、胸とお尻にもう少しボリュームがあれば完璧なのにと！ このCカップ！」

「なっ！？ Cあれば十分でしょう！？ 誰ですかそんなことを言っていた臣下は！ 殺します！」

「はぁ……もう、この国も終わりだな……」

姉妹喧嘩が始まり、魔神ももはやすべてを諦めかけていたその時部屋の扉が開かれ少女が現れた。少女は、可憐で美しかったが、どこかその身の丈に合わぬ知性と母性そして妖艶さを醸し出していた。胸は未だ発達しておらず、胸・腹・尻の区別もつかないほどの幼児体型であったが、圧倒的な存在感を少女は放っていた。少女の正体は、魔神の妻であり、姉妹の母であった。

「なんじゃ、騒がしい。これ、何を騒いでおる二人とも！」

「「お、お母様！！！」」

「おお、妻よ！ 帰っておったのか！」

「「「おかえりなさいませ王妃様」」」

少女の来訪に気づき、思い思いの反応を示す会議参加者達。ともかく、少女の参入によって一気に会議室の空気が変わった。魔神の立つ瀬がないが、少女こそまさに王たるものの風格を有していた。

「うむ、今帰ったぞ。して、何の騒ぎじゃこれは」

「実は……」

話を聞いた少女は、何やら悩んだ後、どこかおかしそうに笑って、ポロリと呟いた。しかしそのつぶやきは、今やすっかりと静まり返っている会議室にはよく響いた。そのつぶやきに、少女の娘たちは思い思いの反応を返し、少女は気軽に爆弾発言でその反応に答えた。

「なるほど、流石私の娘といったところかの……」

「え、お母様も昔は露出狂だったのですか？」

「やったのだ！ お母様と一緒になのだ！」

「いや、私は幼き頃森で生活していたからな。いつも裸だったのじゃ」

その言葉に動揺しなかったのは、其の事実を知っていた魔神ただ一人で、残りの会議参加者たちは面白いほどに驚いて、言葉を失っていた。悲しいことだが、この瞬間こそがその日最も魔神が魔神に見えた瞬間であった。

第二十六話 水着コンテスト（前書き）

女性キャラクター総出演！

第二十六話 水着コンテスト

学院にあるコロシウム、そこでは週に一回イベントが行われている。イベントは様々な種類があり、その中でも料理コンテスト、美人コンテスト、美男コンテスト、格闘トーナメント、絵画コンテスト、音楽コンテストなどが人気のイベントだ。料理コンテストではレーナが、美人コンテストではプルリン先生が、美男コンテストではルイが、格闘トーナメントではセツナが、絵画コンテストではメルが、音楽コンテストではアキラがそれぞれ優勝経験を持っている。また、男子生徒に圧倒的人気を誇るコンテストでロリ・コン・テストというものがありその優勝は第一回から今までずっと校長が優勝している。

そんなコロシウムで今日もあるイベントが行われていた。それは、水着コンテスト。近隣の水着メーカーが出資して行われるこのコンテストは、多くの女子生徒が参加し、評価はすべての男子生徒が着ける。参加者の女子生徒には好きな水着が一着無条件で配布され、最終選考まで勝ち残ればオリジナルの水着がメーカー側からプレゼントされるのでかなり人気が高い。逆に、男子生徒からも憧れの女子生徒の水着姿が見れるので大変人気を博している。特に人気なのは、女子生徒ではないが参加しているビキニ姿のプルリン先生やスクール水着姿の校長である。因みに、カメラの持ち込みは禁止されており写真部がとったものが後日男子生徒向けに販売される。参加女子生徒には、自分の写真が無償で配布される。

今回の参加女性人数は128名で、注目株はもはや名物と化しているプルリン先生や校長のほかに水着の誘惑に勝てず参加したレーナやアキラ、ルイが軽く進めたため参加することにしたセツナなどである。だが意外な人が実は巨乳だったり、見ている男性のほう

恥ずかしくなるような水着を着ていたりすると思わぬ高成績を残せたりするので誰が優勝するかはわからない。ちなみに、毎回のイベント優勝者には2単位が進呈される。

コロシアムの一室で、参加女性たちはずらりと並んだ何千着もの水着から自分の勝負水着を選んでいた。ステージが上がるごとに水着は変更できるが、ステージが上がらなければ最初の一着しか着られないので皆真剣に選んでいる。

「アキラ、どの水着にする？」

「これ」

レーナは、水着の種類が多すぎてどれを選ぶか迷っていた。そこで近くにいたアキラに相談するとアキラはすでに決めて着用していた。赤い競泳水着の様なもので、胸の谷間部分の布地が無いことで競泳水着との差別化を図っているようだった。そして胸の大きなアキラにはその仕様はともよく似合っており、活発で健康的な豊乳少女がそこに存在していた。

「あ、似合う！　じゃ私はこれにしよう！」

「ふうん、結構エロいの選んだんだ」

アキラの水着を見て何かをひらめいたレーナは、おもむろに一着の水着を選びその場で着替えた。黄色のビキニで、紐結びタイプのものだ。スタンダードなものではもっとも露出の激しいものであった。学生らしからぬ色気を有しているレーナにはその水着はものすごく似合っていた。

「そうかな？ でも、プルリン先生にはかなわないよ。私はあそこまで大胆になれない」

「確かに、先生のあの水着はレーナやセツナでも着こなせないかもね」

部屋の片隅で多くの参加者の注目を集めているプルリン先生が来ている水着はキワドイどころかギリギリアウトではないかというほどの過激さであった。その水着とは紫の紐水着とでも表現したらいいのか、細い紐の様なものが首の後ろでリボン結びにされ、その紐がギリギリトップを隠せるほどに乳房に到達するまでの間徐々に太くなる、そして乳房のトップを過ぎると再び紐は細くなっていき、恥部の部分を隠すおにぎりほどの三角の布地と連結する、そこから紐は股の下を通ってお尻の割れ目、背中を駆け抜け首の後ろで結ばれている紐と特殊な結び方で連結される。はっきりに言って痴女装束なのだが、プルリン先生が着ると様になってしまうのだから不思議だ。

「セツナは、お気に入ったみたいね」

「うん、ルイに言われたから出場するみたいだけど実際はルイ以外の男の人に水着なんて見せたくないみたい」

セツナは、布地の多い水色のビキニを着用していた。セツナの学生では一番大きい乳房が、その布地の多いはずの水着を大きく押し上げ、左右上下から胸の肉がはみ出していた。セツナの思惑とは対照的に、どうしてもエロくなってしまっていた。

「やっぱり、校長はあれだよ」

「まあ、あれしかないでしょうね」

当然のごとく校長はスクール水着を着用しており、何ともキャラをわかったチョイスであった。この全く色気を感じさせないボディと水着が毎回プルリン先生の妖艶なボディときわどすぎる水着と人気を二分しているのだから、世のロリコン人口は侮れないものである。

「プルリン先生は、今回どんな水着でくんだろうな？」

「ぜ、前回の貝殻水着はすごかったよね」

「たしかに、貝殻と糸で出来た水着だったしな」

「うん、お尻なんかほぼ丸見えだったよ」

「ああ、あれはしばらく忘れられなかったな」

「でも、前回勝ったのは校長だったよね」

「ああ、純白のスクール水着だった」

「そっちの気はないはずなんだけど、僕もあれはきれいだと思ったよ」

「そうか？ 俺は、プルリン先生の方が断然よかったが」

「ルイの巨乳好きは筋金入りだね」

「メルこそ移り気してんじゃないやねえよ、アキラに見放されっぞ？」

「う、それはいやだなあ」

歴代イベント優勝者の特権としてコロシアムのVIP席に座っているルイとメルは、なんだかんだ言いながらも水着コンテストの開始を今か今かと待ち望んでいた。

前回の教師二人のデッドヒートも相まって、会場は男子生徒と男性教師の熱気と興奮そしてロマンが充満しなんとも暑苦しく怪しげな雰囲気となっていた。また、非公式ながら今回の水着コンテスト優勝者を予想するかけも水面下で行われており、人気の一番は前回優勝者の校長で二位がプリン先生三位はレーナ・アキラ・セツナが並んで六位以下の者たちを人気で大きく突き放していた。

そろそろ、漢たちが我慢しきれなくなって来たその時参加者の女性たちがマントをはおった状態でコロシアムに入場してきた。先頭は、前回優勝者の校長で二番目以降は適当に並んでいた。

男性たちが、参加者の入場で一気に興奮し、思い思いの女性の名前を叫んでいた。彼らは一様に目が血走り、息子が立ち上がり、鼻息が荒く、鼻の下が伸び、いやらしい顔をしていた。

校長が、コロシアムの中央に設置された特設ステージに登り、かわいらしい声で選手宣誓を行った。別に、優勝旗返還などはない。

「宣誓！ われわれ選手一同は、正々堂々と水着姿での美を競うことを誓います。独立魔法学院校長ヨウコ」

男性のコロシアムが震えるほどの大歓声の元水着コンテストは開始された。

第二十六話 水着コンテスト（後書き）

はたして、誰が優勝するのか！？

第二十七話 魔王襲来（前書き）

かなり短いです

第二十七話 魔王襲来

水着コンテストが始まってコロシウムが大いに盛り上がっている頃、学院の門の前にはある人物が立っていた。その人物は、ミニスカートにビキニのトップス加えてマントといった出で立ちで魔女っ子という言葉がしっくりくる姿であった。

メリッサ……それが魔女っ子の名前である。

彼女は、ナイトメア王国の会議で半ば厄介払いという形の留学をさせられることに決まり、現在ここにいる。メリッサの性癖を聞いた理事長がぜひ来てほしいと前々から打診していたという裏事情もあるのだが。

そんなメリッサだが、今回の留学にはなかなか好意的な反応を示していた。

第一の理由として理事長が色々合法的に露出をさせてくれると言っていることがあり、第二の理由として同年代の友達が多くできそうというものがあつた。

王女で魔王という立場的には高貴な彼女には、変態趣味のオジサマくらいしか友達はいなかった。一番年が近い人でも二十代後半で、正直な話メリッサは若い男というものに飢えているのだ。ここで誤解のないように言っておくがメリッサは処女である。彼女は見せることはしてもあまり触らせることはしない。彼女には露出狂の美学というものがあるのだ。YES露出NOタッチこれが彼女のポリシー。ただし痴漢やセクハラは喜んで受けるといふ微妙な例外もあるが。

そんな露出狂のメリッサが水着コンテストと聞いてでないわけがない！ 彼女は、すぐさまコロシアムに向けて移動を開始した。目的は全男子生徒の前での合法的な露出、その為に彼女は完ぺきにアウトな水着を用意してきたのだ。紐Tバックのみ！ 上はつけない！
それが彼女の計画だった。

「見せるのだ！ さらすのだ！ 公開するのだ！ 魔王の裸体を！」

高らかに宣言し、瞬く間に全裸となったメリッサ。そして彼女の眼前には鼻息を荒くしてメリッサを凝視する老人が。理事長である。

「む、むふう〜」

「理事長、彼女だけは水着コンテストに出すわけには参りません」

興奮する理事長の横で秘書は冷静に忠言した。

「誰なのだ！？ 裸が見たいのか？ なら見せてあげるのだ！」

そこまできてやっと二人に気づいたメリッサは、アクロバットな体制をして理事長をさらに喜ばせた。

「うひょう〜！！！！ 最高じゃあああ！！！！」

理事長とメリッサこの二人の波長は恐ろしいほどに合致していた。

「これは……出会ってはいけない二人が出会ってしまったのかもしれない」

最強の変態爺さんと最強の露出狂の出会い。この事件は独立魔法学院を大きく揺るがすことになる……かもしれない。

一方その頃コロシウムではコンテストセミファイナルステージが行われていた。

現在残っているのは16名いずれも互いに劣らぬ美女や美少女ばかり。

もちろんルイの取り巻きたちも残っている。

セミファイナルは単純な投票形式で行われている。

票の集計が終わり、大画面に結果が映し出された。

1位 ハナ

2位 校長 プルリン先生

3位 アキラ セツナ レーナ

謎のハナなる人物がルイオールスターズや校長を抑えて一位の座に輝いていた。

ハナとはいったい誰なのか？

メリッサはコンテストに出場できるのか？

コンテストの決勝は波乱の予感である。

第二十八話 嵐のように（前書き）

久しぶりです皆さま。お待ちせいたしました。

第二十八話 嵐のように

コンテスト会場は、クライマックスを迎え大いに盛り上がっていた。

「レディ&ジェントルメン！ お待たせしました、いよいよ決勝です。解説の教頭、優勝は誰になると予想しますか？」

鼻息荒く解説するのは、お祭り好きな放送部員ことレイ・ワトスン。彼はコンテストやイベントの度に進んで解説役や進行役を務める。また、ご意見番を選ぶこともよく行う。

「うーん、やはり今回はダークホースの彼女が勝ちそうですね。彼女は萌えをもっています！」

「教頭……あなたを解説に呼んで正解でした！」

教頭はあまり見せない熱意にあふれた目をして、威風堂々と背筋を伸ばし、危ない宣言をした。それをきいたレイ・ワトスンは歓喜のあまり教頭の手を取り、笑顔で涙を流している。

セミファイナルにて変態……いや、紳士達の心をわし掴みにしたハナ選手は確かに解説席の二人の心もわし掴みにしていた。

「泣くな、同志よ……」

「俺は……俺は！」

二人の間にはいけない雰囲気と共に何とも近寄りがたい紳士の空間が存在していた。もし、この場が一切盛りあがってなく、それな

りに彼らに注目していたものがいたとしたら、きっと彼らの周りにはぽっかりと人のいない空間が出来上がっていただろう。いや、もしかしたら同志達が集まってきたかもしれないが……

「真面目にアナウンスをしないのであれば消しますよ？」

盛り上がる二人の元へ＜断罪者＞が現れた。名を……いや、彼女の名前よりも役職を言った方が早いだろう。＜理事長秘書＞これだけで彼女の苦勞がわかるというものだ。日ごろから変態行為を繰り返す裏では＜漢の夢を実現した者＞と呼ばれる理事長を相手にし、校長と教頭の暴走を止める毎日。あまりに不幸である。加えて＜影の支配者＞だの＜恐怖の大魔王＞などと言われ生徒と教師その両方から恐れられているのだ。それ以上に頼りにされてもいるが……

「「ひっ……！！！」」

そんな彼女は、オイタが過ぎる人々にとっては災害以外の何物でもない。狙われたら最後、どんなお仕置きが待っているかなど想像もできない。一説では学園中に響き渡るほどの悲鳴を上げさせられた者もいるとか。

そのような背景もありオイタが過ぎた二人は恐怖した。断罪者の登場に。自らの最悪の結末が垣間見えてしまったのだ。精神的崩壊という結末が。

「理事長も見ていますですから、きちんとしてください」

だが、疲れているのか機嫌がいいのかわからないがなぜか彼女は二人の変態を見逃した。軽くいさめる程度で済まされたのだ。これがいつもなら理事長室行きなのだが。

「す、すみません……」

しかし、とにかくこれ幸いとすぐに謝罪をした二人は解説をきちんとやりなおし始めた。二人の声が上ずっていたのはしょうがないことだろう。生物というものは根源的恐怖にあらがえないものなのだ。

「さ、さあて！ 大会ついに決勝ですが、解説の教頭、優勝者ズバリ誰だと思われます？」

「そ、そうですね……順当にいけば校長かプルリン先生でしょうが、先ほどの投票で一位を取った彼女なかなかいですからこの三つ巴になるのではないのでしょうか？」

チラリと断罪者を見てご機嫌をうかがう二人。

「ほほう、しかし他の女性たちも魅力的な方たちばかりですよ？」

「ええ、先ほどの三人の可能性が高いというだけで他の女性達の優勝も大いにあり得ます！」

大きな反応を示さず、どうやら及第点らしいと判断した二人は安心して解説を続けた。

「さあ、誰が優勝するのでしょうか！？ 決勝戦開幕です！」

一部始終を見ていた放送部員Aはぞんざいな態度で進行役をこなした。余談だが、彼の眼からは光が失われていたらしい。

「えー、それでは決勝戦出場者の入場です」

会場にファイナリストたちが入場を始めた。

一番手はセミファイナルで一位を獲得したハナ選手、予想以上に着やせするグラマーな肢体と手の届きそうな程度の美しさが会場の変態達を虜にする。恥ずかしがっているところもポイントが高い。

二番手はセミファイナル同率二位の二人。校長、言わずと知れたロリっ子ボディにかわいらしい顔、それに加えて圧倒的最年長というその筋の方にはたまらないポテンシャルを持って会場入りした。プルリン先生は校長とは真逆の正統派グラマラス美女。いっそ違和感のあるほどの大きさの乳房と折れそうなほど細い腰に大きく美しいお尻、長くむっちりした美脚そのすべてが美しく妖艶に彼女を仕立てあげている。彼女を見た会場の変態はその多くが急に前かがみになった。

三番手は、セツナ・アキラ・レーナでこちらも正統派美少女三人。そろって大きく美しい胸と抜群のスタイルを持っており、同年代の変態達から熱い視線を集めている。だがこの三人心に決めた相手がいるというのとどこか近寄りがたいということで半ば神聖視されているので実はあまり人気はなかったりする。

以上でファイナリストはすべてのはずだが、一つの黒い影が会場に侵入する。黒い影はファイナリストに背を向けて、会場の変態達を見渡し、纏っていた漆黒のマントを行きよいよく投げ捨てた。そこに現れたのは奇妙な仮面をつけた全裸の巨乳少女。

流れたのは一瞬の沈黙……そして、爆発したように会場中の変態達は叫び出した。奴らは皆鼻から赤い液体を噴出し、ズボンを汚し

ている。決勝戦の緊張した雰囲気は一転、会場は怪しげなおいと鉄のにおいが充満した危ない雰囲気となった。

そこで動いたのは理事長秘書と理事長、素早く捨てられたマントを拾い巨乳少女にかぶせるとすぐさま会場を後にした。呆然とするのはファイナリストたち。会場の男子はみな未だに興奮し、鼻と下腹部を抑えている。

「メ、メリッサさん！ あなたどういうつもりですか！？ 仮面をつけているとはいえ、全裸であんな大衆の面前に現れるなどっ！！ 正気の沙汰とは思えません！」

「私はきちんと理事長の許可をもらったのだ！ 仮面をつけたら全裸でステージに立っていいと言われたのだ！」

「うむ、それくらいさせてあげねばこの娘も納得せんと思ってな。まあ、儂がその状態をみてみたかったというのもあるのじゃが。いやあ、巨乳美少女の露出して興奮するのう……」

「……っ！！！？？？ こ、この人たちはなんておかしな頭をしているんですか……」

「おかしいのは秘書さんなのだ！ この快感、一度したらきつとわかってもらえるのだ！」

「儂もそう思うぞメリッサちゃん」

「……もう、いや………」

第二十九話 優勝は（前書き）

ぐだぐだになってしまいました

第二十九話 優勝は

突然の露出狂の乱入で会場はパニックに陥っていた。呆然とするファイナリスト達、興奮の収まらない観客、卑屈になる女性。とてもではないが水着コンテストを続けるのは無理があるように思われた。しかしそんな中で正気を失っていないものがいた。教頭、その人である。彼は魔法で大きな爆発を起こし、皆の注目を集めるとコンテストの再開を宣言した。

「みなさん！ 予定外の乱入がありました、気にせずコンテストを再開しましょう！ では、改めまして水着コンテスト、決勝戦の開幕です！」

ここで再び教頭は大きな花火を魔法で打ち上げ開幕の合図とした。会場の人々も気持ちを切り替え大きな声援をステージへとささげた。

「さあ、みなさん。ここからは解説者の私が司会進行を務めさせていただきます！」

いつの間にか解説席からステージへと移動してきていた彼は勝手に司会進行を始めた。本来の司会進行役はトイレに行ったつきり帰ってきていない。

「まずは、先ほどの投票で見事一位を獲得した優勝候補筆頭ハナ選手！ 武器はその手の届きそうな美しさと服の上からではなぜかわからない豊満ボディ＜俺だけが知っている本当の彼女！＞とつい叫んでしまいそうな雰囲気です！」

「次にグラマラスな出場者が多い中、唯一ロリっ子ボディを武器に

ここまで勝ち残ってきた我らが校長、その完成されたロリっ子ボディで優勝をつかむのか!？」

「残りは、皆さんグラマラスな美女ですね……さて、決勝戦開まぶろばふぁ!!!!」

そこにいたのは、あまりの粗雑な紹介にぶち切れたグラマラスな美女たち。手には鉄バイブや釘バット、のこぎりにハンマーなどが持たれており全員素敵な笑顔をしていた。彼女らの背後にはひとしく悪鬼の幻が見えたとは一命を取り留めた司会者の談である。

「殉職した二代目司会者に引き継ぎましてここからは私教頭が司会を務めさせていただきます。さて、決勝戦の方法はズバリ萌え! いかに関客の心を驚掴みにすることができるのが肝です! では、張り切ってまいりましょう……アピールタイム………かいしゃああああああ!!!!」

一番手は、ロリ校長。その背徳的な容姿から繰り出される妖艶なポージングに、お兄ちゃんと上目使いプラス涙目で言われた観客……主に男たち……は鼻血をだして気絶した。

二番手は、プルリン先生。エロティックに繰り出される淫語にくわえ校長に比べてあまりにたわわに育ったその肢体はごちそうさまの一言に尽きた。多くの観客はトイレへと赴きました。

三番手のアキラは「べ、べつに優勝したいとか思っていないんだからね!!!!」というツンデレ発言で会場を生温かい空気にした。

レーナは「ルイ」の一言で優勝候補からは外れ、セツナは「見るな、腐る」というあんまりな一言で場を凍らせた。

そして、最後に登場したハナちゃんは教頭におずおずと手を上げながら質問した。

「あの……先生、萌えってなんですか？」

その純粹さと穢れのなさに会場中がグッと萌えた。

鼻息を荒くした教頭は、だらしなく鼻の下を伸ばしつつも演説を開始した。

「萌えというのはだね！ 可愛らしい子供を見た時や守ってあげたいような存在を見たときに感じる庇護欲とでもいった方がいいのかな。こう……見ただけで悶えてしまうほどのかわいらしさとか……うーん、これはいいえてむずかしいな。つまり、今のハナちゃんのことだよ！！！」

司会にあるまじき聾盲発言であったが、会場にいる男の気持ちとは同じであった。しかし、やはりそのセリフを許せない乙女たちはいた。他の出場者たちである。彼女たちは百鬼夜行に従える幻覚を見せるほどの迫力で教頭を見て殺意を飛ばした。教頭は情けなくも漏らしてしまったのだが、それを責められるものはいないだろう。殺意とは時に人ひとりを殺すのである。

一方観客席には妖怪の主と化した美女たちを複雑な表情で見ている者たちがいた。メルとルイである。二人は普段目にするものない親しい女性たちの裏の部分を見て色々思うところがあったようだ。

「メル……女って怖いな」

血が出るほど拳を握り、唇をかみちぎるほど強く噛んで震えを抑えているルイは震える声で、メルにそういった。

「……うん」

メルは顔を真っ青にして、目には涙を浮かべておごそかに頷いた。

美女たちの怒りを買ったもののコンテストはそのまま進行していった。

アピールタイムを終え、会場全員が専用の投票装置を使って投票を行う。

ざわめく会場……五分程後投票の集計終了を知らせる音が会場に響き渡った。

静まり返る会場、司会の教頭は係員から投票結果を受け取り会場を見渡して結果を発表した。

「では、水着コンテスト結果発表を行います。まず、第三位アキラ！」

会場が拍手に包まれる。結果を知ったアキラは納得の表情を浮かべ頷いた。

「一番多い投票理由は結局はツンデレというものでした」

投票理由を聞いた途端赤面していたが。

「次に第二位、プルリン先生！年上の美女最高！という言葉が一番

多かったです」

プルリン先生はそのグラマラスな身体を震わせて色っぽく喜んだ。

「最後に第一位、二位のプルリン先生に圧倒的な差をつけて優勝した……ハナ選手！投票コメントで一番多かったのは萌え！というものでした。かくいう私も萌えました！順当な結果ではないでしょうか？ また逆に、校長がベスト3から外れたことは今までの流れを断ち切ったと言っていていいでしょう！個人的には嬉し……こほん、とにかくみなさん優勝したハナ選手に盛大な拍手を！」

会場全体から盛大な拍手と祝福の声が響き渡った。そして、それが一段落したところで教頭がハナ選手にマイクを向け感想を尋ねる。

「優勝した感想は？」

もじもじしながら、しかし意を決して恥ずかしそうにハナは答えた。

「嬉しいです。私なんかがたくさんの美人な方々と競って勝てたなんて今でも信じられません。でも、皆さんに選んでもらえたことはとてもうれしいです。ありがとうございました！」

このコメントに対する盛大な拍手と共に水着コンテストはその幕を閉じた。

第二十九話 優勝は（後書き）

次はがんばるので見てくださる方よろしくお願いします

第三十話 賢者と妖精と友人（前書き）

賢者のお話です

第三十話 賢者と妖精と友人

賢者は憂鬱な午後を過ごしていた。窓際に座り、肘をつき溜息を吐きながら外を眺める。恋でもしているようだ。だがまあ、そんなことはもちろんない。長い年月を生きた賢者は肉体はさておき精神的にはとうの昔に枯れているのだから。

では、何が彼を恋する乙女状態にしているのかというと二つ理由がある。一つはいつものようにエルフィに説教をされたこと、そしてもう一つは……今日彼のもとに来る訪問者たちを思っていることだ。

今日来る訪問者は、彼と同じように長い年月を生活しているいわば昔馴染みという奴なのだが片やいつも悩みを抱えているデカブツ男で片や常にニヒルな笑いを携えている幼女というなんとも疲れるものたちなのだ。

「はあ、久しぶりに会いたい気もするが……会いたくない気もする……」

そんな沈んでいる賢者を見て、エルフィは珍しく彼を慰めた。

「賢者様、どうなされたのですか？ 確かに今日もお説教いただきましたが、そこまで凹むことはないのでは？」

小首を傾げ、下半身のみに布切れを纏った妖精は紅茶を飲みながら言った。

「ふう……説教はいい加減やめてほしいのだが、理由はそれだけではないのだ」

「と、いいますと？」

「ああ、今日の来客の……どうやら来たようだ」

まるで巨象が歩いているような地響きが賢者の家を揺らし始めた。そしてそれは同時に来客を知らせる合図であった。

「なんですか？ この地響き……」

「来客者の片割れの足音だよ」

「あ、足音！？」

エルフィが驚いている中、玄関のベルが鳴らされた。賢者はそれを聞くと仕方なしに立ちあがり、エルフィは急いで胸にビキニをつけ、紅茶と洋菓子を用意し始めた。

賢者が巨大な玄関を開けるとそこにいたものは六メートルを超える巨漢と少女の外見をした何かであった。二人は賢者を見るなり挨拶をした。

「賢者殿、お久しぶりですな」

「おお、魔神殿かれこれ200年ぶりになりますかな？」

「約百年ぶりじゃ、痴れ者が」

「……シヨウコさん、相変わらずお元気そうで残念です」

「ふん、貴様もまだ生きていたのだな。嘆かわしい」

「……！」

ひとしきり不気味に笑いあった二人はおもむろに抱き合った。そして魔神も優しく二人を包みこんだ。再会の抱擁である。このやり取りは会うたびに行われているもので、賢者にとっては100年ぶりのやり取りであった。

「久しぶりでですね二人とも、なんでもお子さんが出来たとか？」

「ええ、娘が二人ほどできました」

「きつと、シヨウコさんの子供だから幼児体型なのでしょう？」

「残念じゃが、二人とも普通の美女に育っておるわ……外見は」

「何やら不穏な言い方ですが、とりあえず中に入ってください」

「おじやまします、賢者殿」

「うむ、失礼しようかの」

二人が中に入るとそこには五十センチ大となったエルフィがいた。エルフィは二人にパレオの端を持って麗しいお辞儀をし、あいさつを行った。獣はただ部屋の隅で寝ている。

「いらっしやいませお客様。私賢者様の身の回りの世話をさせていだいております妖精のエルフでございます。本日は誠心誠意お

もてなしさせていただきます」

大きな妖精を見て二人は面喰っていたがすぐに表情をやわらかいものにして、彼女にあいさつした。

「丁寧なあいさつ感謝する。妾はショウコ、これの妻をやっておる」

「我はサタンといいます。ある国で王などをやらせていただいております」

挨拶を終えた二人はクルリと賢者の方を向き人の悪い笑みを浮かべた。

「な、なんですか？」

「いや、人の趣味にとにかく言うつもりはありませんよ、私たちもこの体格差ですしね……」

「まったく、賢者よ主もいい趣味をしておるな。のう？」

「くっくくくくっ」

「はあ、二人して妙な笑い方をしないでください。彼女は私の妖精ではなく、しばらく育てていた弟子の関係者です」

「弟子？近くに見当たらんが、その弟子とやらは今どうしておるのじゃ？」

「今は、学院に行っているらしいですよ」

賢者の言葉を聞いた夫婦は大層な驚き方をした。妻は、目を大きく見開き身を乗り出して夫はなぜか胃を強く抑えて。

「なんと!？」

「賢者殿その話は本当ですか？　実はうちの娘もいるんですよ学院に……問題児ですが」

賢者は、やはりこちらにもめかみを押さえて悩ましげな様子だ。

「そうなのですか……それは危険ですね、うちの弟子は天然のたらしですから」

「もらってくれるなら側室でも是非もらってほしいものじゃよ」

しかし、ショウコはむしろそれで構わないという。サタンも大きく何度もうなずいているがその衝撃で部屋が大きく揺れている。

「えーと、弟子を過大評価しないでいただきたいのですが？」

賢者は、悩んだ末そういう結論に達したらしい。

だが、真実は残酷？　であった。

「いや、別に見たこともないお主の弟子を評価しているわけではないのじゃ」

「むしろ、あれをどうにかしてくれるならこの際どこの馬の骨でもいいのですよ……」

夫婦のあんまりに酷い言い様に賢者は絶句してしまった。

「っ！！！！！」

夫婦はそんな賢者を見てなおも続ける。

「確かに酷いことを言っておるのはわかっておる、わかっておるが夫と長女の苦勞と国の未来を考えるとの……それにあやつは魔王でもあるし、何といってもあの性格じゃからして」

「ああ、何があっても大丈夫だろう……」

悲壯感ただよる二人を見た賢者はひそかに弟子へ黙禱をささげたという。

第三十一話 露出狂(改) (前書き)

少し話を追加しました

第三十一話 露出狂(改)

俺は人生初めての経験をした。

巨乳の美少女を前にして、あろうことか怯えてしまったのだ。

俺は巨乳が好きだ。

美少女が好きだ。

美女が好きだ。

しかし……痴女は怖い。

あれは、俺が転生する前のことだった。

夜道を歩いているとコートを着た熟女が前から歩いてきた。

美人でスタイルもよかったのでちらっと見ていたら、目があって微笑まれてしまった。

恥ずかしくなった俺は、下を向いたのだが、気配を感じて顔を上げるととんでもない光景が目の前に広がっていた。

美女がコートを広げ、その熟れに熟れた肢体を惜しげもなくさらしていたのだ。

当時の俺は未だ女性の裸を生で見たことがなく、初めて目にしたのがその体だった。

見られるものではあったが、おぞましくもあった。

怯える俺に気を良くした熟女は俺に抱きつき唇を強く奪った。

舌をからませ、ズボンのファスナーを開け股間を擦ってきた。

情けなくも俺は、反応しながら同時に尿を漏らしてしまった。

俺はファーストキスを奪われ、童貞も奪われそうになったのだが運よく若い女性を通りがかり大声を出したので痴女はすぐさま逃げ去った。

あれ以来俺は痴女が苦手だ。

しかし、巨乳は好きだ。

いろんな意味であの出会いが衝撃的だった。

そんな過去の出来事から、いかにど真ん中ストライクの美少女であっても俺は痴女が苦手であった。

もう一度言おう、俺は痴女が苦手だ。

「ふむ、どうしたのだ？　もっとじっくりなめまわすように見ていいんだぞ？」

だから、この水着コンテストに乱入し裸体をさらしたこの女が、目の前で裸体をさらしていても興奮はしない。それどころか

「お……」

「おっぱい？ ふふん、自慢のFカップなのだ！」

……恐怖する。

「犯されるー！！！！レーナ、セツナ、プルリン先生助けてくれ！！！」

ルイは、そう叫ぶと必死にメリッサから逃亡した。逃げるルイを見たメリッサは、ためらいなくストーキングを開始した。

メリッサから逃げ切ったルイは部屋にひきこもり、プルリン先生の胸の中でガタガタ震えていた。プルリン先生は、優しくルイを抱きしめ、髪を撫でながらも少し疲れているようだ。プルリン先生の元へルイが走ってきて、何も言わずに抱きついてから、5時間になる。普段の自信家で傲慢なルイの姿はどこにもなく、幼子の様に震える少年しかそこにはいなかった。

「ルイ君、そろそろ何があったのか教えてくれてもいいんじゃない？」

まんざらでもないプルリン先生だったが、流石に5時間もあやし続ければ鬱陶しくもなる。ルイの顔を両手で挟み、無理やり眼を合わせて、尋問したことは誰も責められないはず。

「お、俺は……巨乳でも、美女でも、美少女でも……」

ルイの目の焦点は定まらず、うわ言のように何かをつぶやく。

「ん？ なぁに？」

そして、何かを思い出したかのかいきなり震え始め、顔を引きつらせる。

「ち、ち……」

プルリン先生は不思議そうに首を傾けた。

「血？」

震えるルイは、悪魔の足音を聞いた。何者かが廊下をものすごいスピードで疾走してきているのを音と探査魔法で理解したのだ。その足音は次第に大きくなり、間違いなくルイのいる部屋へと近づいてきている。そして、音は距離を縮めついに扉へと到達した。

「ドォーン！！！！どうもこんにちは！皆のアイドルメリッサちゃんの登場な・の・だー！！！！」

鍵をかけているはずの扉は蹴り破られ、マントをはおった全裸のメリッサが部屋へと登場した。そして彼女は、勢いそのままにルイへとダイブを敢行した。

「痴女は駄目なんだー！！！！」

ルイは全裸の巨乳美少女に抱きつかれても、トラウマのせいでかつてないほどに恐怖し、生れてはじめての失禁を経験した。プルリン先生はあまりの出来事に大きく眼を見開き固まってしまっていた。

このあと、正気を取り戻したプルリン先生によりルイは救出され、メリッサは一通りルイをむさぼって納得したのか、再び部屋の外へと駆け出して行った。

このことはその日の内に理事長へと伝わり、翌日には全裸で疾走するメリッサの話はく謎の変態巨乳美少女、校内を全裸で疾走する＞という形で全校生徒に広まっていた。理事長はこの件に対し一切不問にしたのだが、メリッサともども秘書にきついお灸を物理的に与えられることになった。

こうしてまた、校内に響き渡る悲鳴という七不思議ができることとなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3613k/>

異世界者

2011年6月5日11時08分発行